

I 普通作物

1. 水 稻

〈梗 種〉

(1) なんぎよく (渡育143号)

来歴 「なんぎよく」は、1950年(昭25)北海道立農業試験場渡島支場において、「新栄」を母とし「渡育130号」(「陸羽132号」×「晩生栄光」)を父として人工交配を行い、以米系統育種法により選抜固定をはかったものである。1956年(昭31)「渡系152」の系統番号をつけ生産力検定予備試験、1958年(昭33)「渡育143号」の系統名をつけて生産力検定試験、特性検定試験を行い、1959年(昭34)から原種決定現地試験に供試し、地方的適否を確かめ1961年(昭36)、優良品種に決定し、「なんぎよく」と命名された。

特性の概要 1.草状 稈長は「南栄」より短く中位穂数型に属する。穂長は中、粒着はやや密に属し、芒は1穂中に無～中芒のものが相半し、稃先色は褐色である。

2.玄米の性状 形状は中形、中粒で艶色を呈し、腹白は比較的少なく、品質は「巴まさり」と同程度かむしろ良質の上の下で食味も良好である。

3.熟期出穂期、成熟期ともに「南栄」にくらべると1両日おそく、「巴まさり」より3日内外早い中性種に属する。

4.障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性は「南栄」よりやや劣り「巴まさり」よりは強いやや強、耐冷性は「南栄」よりはやや弱く中程度である。耐倒伏性は「南栄」程度でやや強である。

5.収量その他 「南栄」と大差ないが、品質は良好である。

栽培適地と奨励態度 道南部の条件の良い地帯で「南栄」の品質改善のために置換える。〔1966(昭41)廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		収 歩 台	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 粒重	1,000 粒 重		
渡島支場	冷床	8.8	9.24	154	81	16.0	21.0	416	472	818	21.3	82.0	1956～ 1960

(2) みちひかり (渡育146号)

来歴 「みちひかり」は、1951年(昭26)北海道立農業試験場渡島支場において「渡育130号」(「陸羽132号」×「晩生栄光」)を母とし「渡島白毛」を父として人工交配を行い以後選抜固定をはかったものである。1957年(昭32)「渡系161」の系統番号をつけ生産力検定予備試験に供試、1958年(昭33)「渡育146号」の系統名をつけ、生産力検定ならびに特性検定試験に、また1959年(昭34)から原種決定現地試験に供試し、1961年(昭36)優良品種に決定し、「みちひかり」と命名された。

特性概要 1. 草型は中間型に属し、稈長は「新栄」よりやや長い。粒着は「栄光」「新栄」程度のやや密である。

2. 稃先色は黄白鮮明で穂の穂半々くらいに白色短～中芒が散在している。

3. 玄米は中形、中粒で腹白はほとんどなく極めて良質である。なお食味は「栄光」と遜色ない。

4. 出穂期・成熟期は「新栄」よりも2～3日早い。早生種に属し、登熟日数は他品種に比し短い。

5. 「いもち病」に対しては「栄光」と大差なくあまり強くない。

6. 耐冷水抵抗性は弱の部に属し、不稈粒の発生は多い方である。

7. 収量は多収性ではなく「新栄」にはほぼ匹敵する。栽植密度を増すことにより増収の傾向が認められる。

栽培適地と奨励態度 早生種に属するので「新栄」などの栽培地帯で冷水、いもち病の被害の少ないところで良質米の生産を目的とする地帯に適する。

栽培にあたっては次の注意が必要である。1. 登熟期間は短かいが耐冷性が弱いので注意を要する。2. 中間型で穂数が少ない方なので多少密植が有利である。3. 登熟日数が短かく、草体の褪色に先立ち登熟が進み、過熟に陥り易いので、早目の刈取が必要である。〔1966年(昭41)廃止〕

試験場名	苗代 機式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 ㍔ 重	1,000 粒 重		
渡島支場	冷床	8.3	9.17	149	86	16.0	18.0	421	459	818	21.0	82.6	1957～ 1960

(3) かんまさり (北育7号)

来歴 「かんまさり」は、北海道立農業試験場美深分場で1948年(昭23)に「農林15号」を母とし「北見赤毛1号」を父として人工交配を行い、F₂で北海道立農業試験場北見支場で分譲を受け、以来選抜固定をはかってきたものである。1955年(昭30)に「5501」の系統番号をつけ生産力予備試験に供試した。1956年(昭31)より「北交7号」の系統名をつけ、原種決定本試験に供試すると共に、原種決定現地試験にも供試し、地方適否を確かめた。その間、1958年(昭33)系統名改称により「北育7号」と改めた。1961年(昭36)、優良品種に決定し「かんまさり」と命名された。

特性概要 1. 出穂期、成熟期共に「農林20号」と同程度で、中生種に属する。

2. 草型は穂数型で、草丈は中位。穂長は、中～やや短、粒着は中～やや疎で長芒を有する。稃先色は、成熟前は黄白であるが成熟後は赤褐色となる。

3. いもち病抵抗性は、「農林20号」と同程度で、やや弱に属する。

4. 冷水抵抗性は、障害型には強に属し、「農林34号」よりはるかに強く「農林9号」「北見赤毛1号」より強い。

5. 耐倒伏性は、「農林20号」よりやや劣るが「農林15号」より強く、中の部に属する。

6. 収量は、豊作年には「農林20号」に比べて同程度かやや劣るが、冷害年には、かなりの増収が期待できる。

7. 玄米の形状は中、大きさは中～小で、品質は「農林20号」とほぼ同じで中である。

栽培適地と奨励態度 耐冷性は極めて強い部類に属するので、冷涼な北海道東北部の網走支庁管内に適する。特に本品種の特性より見て、冷涼な気象の地帯に、または冷水灌漑の水田用および水口用品種として奨励する。

栽培上の注意としては、直播よりも移植に適する、熟期より見ても出来るだけ移植栽培が望ましい。また、いもち病抵抗性、耐倒伏性の面から見ても極端な多肥栽培はさけること。直播する場合は多肥にならぬよう注意を要する。いもち病発生に注意し、多発の年には適期防除を必ず励行すること。〔1966年（昭41）廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					穂長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北見支場	直播	8. 13	10. 2	129	82	15. 0	28. 0	396	646	794	18. 0	82. 1	1958～ 1960
	冷床	8. 8	9. 30	152	83	16. 9	20. 0	414	499	805	18. 3	82. 7	1957～ 1960

(4) はやみのり（北育15号）

来歴 「はやみのり」は、北海道立農業試験場美深分場で、1948年（昭23）「農林15号」を母とし「北見赤毛1号」を父として人工交配を行い、F₂世代に北海道立農業試験場北見支場で分譲を受け、以来選抜固定をはかってきたものである。1956年（昭31）に「3102」の系統番号をつけ、生産力検定予備試験に供試した。1958年（昭33）より「北育15号」の系統名をつけ原種決定本試験に供試すると共に、原種決定現地試験にも供試し、地方適否を確かめた。1961年（昭36）、優良品種に決定し、「はやみのり」と命名された。

特性概要 1. 出穂期、成熟期共に「農林20号」より早く「農林15号」よりわずかに遅く、「農林19号」程度の早生種に属する。

2. 草型は穂数型で、草丈は中位。穂長は中で粒着は中～やや疎。長芒を有し、稃先色は黄白である。

3. いもち病抵抗性は、「農林20号」と同程度か、やや劣る程度でやや弱～弱に属する。

4. 冷水抵抗性は、障害型では「かんまさり」よりやや劣るが「農林9号」なみの強さである。

5. 耐倒伏性は、「農林20号」より劣り「農林15号」程度である。

6. 収量性は、豊作年には「農林20号」に比べて同程度かやや劣るが、冷害年においてはかなりの高収を示し、「かんまさり」よりも優っている。

7. 玄米の形状は、中、粒大は中～小。品質は中の下で「農林20号」並である。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					穂長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北見支場	直播	8. 8	9. 27	124	82	13. 6	31. 0	414	554	806	18. 9	82. 9	1958～ 1960
	冷床	8. 3	9. 25	148	84	15. 3	22. 0	458	463	814	19. 3	83. 4	1958～ 1960

栽培適地と奨励態度 耐冷性は「かんまさり」よりわずかに弱い、極めて強い部類に属する早生であるから、網走支庁管内で「かんまさり」より更に早い品種を望む地方に奨励したい。

栽培上の注意については「かんまさり」と同様直播より移植栽培に適する。また、多肥栽培をさけ、特に直播においては倒伏の危険性があるので注意を要する。いもち病の発生にも注意し、適期防除に心がけること。〔1966年（昭41）廃止〕

(5) ささほなみ（空育4号）

来歴 「ささほなみ」は、1951年（昭26）北海道農業試験場において「藤坂5号」を母とし「農林15号」を父として人工交配を行い、引続き同場においてF₁養成、F₂個体選抜を行い、1954年（昭29）F₃より北海道立農業試験場（岩見沢水稻試験地）にゆずりうけて、いもち病耐病性、稈質などを重点に選抜固定をはかってきたものである。1956年（昭31）に「空系3110」の系統番号をつけ生産力検定予備試験、1958年（昭33）に「空育4号」の系統名をつけ生産力検定試験を行うと共に関係試験機関等において適応性を検定し、1959年（昭34）より原種決定現地試験に供試し地方適否を確かめた。1961年（昭36）優良品種に決定し、「ささほなみ」と命名された。

- 特性の概要 1. 稈長は「みまさり」よりやや短程でこの熟期のものでは最も短く、穂長は長穂、穂数は中程度の中間型品種である。無芒で稈先色は黄白、粒着密度は「栄光」程度のやや密、1穂着粒数は「栄光」より多い。
2. 稚苗の状態は草丈中位、葉身狭く濃緑色を呈する。本田における分けつ始は「みまさり」同様遅く、生育中期においても葉身狭く、濃緑で直立しており、分けつ数が少ないため株間の透しが大い。登熟後期でも止葉が立っているため「栄光」より草丈が高く見える。
3. 玄米はやや小粒で長粒粒色を呈し、光沢は「栄光」より劣り、「みまさり」程度であるが、腹白がなく縦溝は浅く品質は中の上である。
4. 出穂期、成熟期とも「栄光」と同じ程度の中生種、しかし穂揃日数やや多く登熟不整の傾向があり、特に多肥栽培で成熟期が遅れる。
5. 稈は強稈で多肥栽培でも倒伏はほとんど見られないが、柔軟性に欠けるため極度の多肥栽培では根際から倒伏減収する。
6. いもち病抵抗性は「新雪」程度の強さを有す。
7. 収量性は瘦薄地では「栄光」より劣るが、中位以上の地力条件下では「栄光」程度の多収を

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 数	玄米重	稈重	1ℓ重	1,000 粒重		
空知支場	冷床 (沖積土)	8. 6	9. 23	151	66	17.3	18.7	454	343	820	21.0	79.8	1958～
	冷床 (帯泥炭)	8. 9	9. 27	154	65	17.8	19.5	502	368	819	22.1	80.0	1960
渡島支場	冷床	7.29	9.10	141	82	16.0	17.0	413	389	811	20.4	81.0	1958～
上川支場	冷床	8. 2	9. 27	158	68	18.4	21.0	516	404	829	21.0	83.0	1959～
	直播	8. 6	9. 26	135	61	14.7	33.0	509	442	837	20.8	82.8	1960
原原種農場	冷床	8. 7	9. 23	153	63	17.4	16.1	433	336	822	20.4	83.7	1958～
													1960

示し、特に登熟の進む地帯の多肥条件では「栄光」より優る。しかし登熟期間、不順な天候にあうと登熟不整となり、青、屑米が多くなり収量が低下する。

栽培適地と奨励態度 本品種は本道中央部、中生種地帯全域に適する。中央空知以北の内陸的気象の登熟の進む地帯では普通肥より多肥栽培において多収を示すが過度の多肥栽培は避け、栽植密度を高め収量性を増加させるべきである。〔1969年（昭44）廃止〕

(6) テイネ（北海180号）

来歴 「テイネ」は、北海道農業試験場において、外国稲のもつもち病高度耐病性を北海道品種に導入することを目的として、1950年（昭25）以来継続してきた水稻育種に関する試験において育成された品種である。

1953年（昭28）に「関東53号」を母とし、「栄光」を父として人工交配を行い、引続きF₁を養成し、1955年（昭30）F₂では人工接種による幼苗検定法によって葉いもち耐病性を検定して耐病性を主とする個体選抜を実施してきた。1956年（昭31）F₃以降は、畑地晩播による葉いもち病検定ならびに泥炭土壌水田における多窒素栽培による穂頸、枝梗、節いもち病検定を行い、また各世代ともいもち病に対する高度耐病性を重点にして、米質、稈質、収量等を勘案しつつ、通常の系統育種法により選抜固定をはかったものである。1958年（昭33）には「札系5806」の系統番号をつけ生産力検定予備試験を実施、1959年（昭34）には「北海180号」の系統名をつけ生産力検定試験を行うとともに、道内の試験機関において適応性を検定し、さらに冷水掛流法による耐冷性検定もあわせおこなった。1961年（昭36）には、原種決定現地試験により地方適否をたしかめ、1962年（昭37）優良品種に決定し、農林省に新品種「テイネ」（水稻農林137号）と命名、登録された。

特性概要 1. 稈長は「新栄」よりやや短いが「栄光」より長いやや短稈種に属し、穂数は「新栄」より多く穂数型で、稈の太さは中位、剛さは「新栄」より柔軟であるが中位である。
2. 穂はやや短く、粒着はやや密である。無芒で稈先には着色しない。成熟期における熟色が良好で、葉の枯れ上りはややおそい。
3. 苗の生育よく、初期分けつはとくに旺盛である。
4. 玄米の形状は「新栄」と同様で中位、大きさは「栄光」なみの中、色は中程度の飴色を呈し光沢は極良、腹白少く、心白はごくまれにみられる程度、縦溝は「新栄」より浅い。

食味は中の上程度で「新栄」にくらべるとややおとる。

5. 出穂期は「新栄」と同じで晩生の早に属する。成熟期は「新栄」よりも早い。
6. 登熟の速さは普通肥条件では「新栄」「栄光」よりはやいが多肥条件では同程度となる。
7. いもち病耐病性はN菌に対しては従来最も強いといわれた「石狩白毛」よりも強いが、C菌には弱い。
8. 倒伏抵抗性は中の上程度で、多肥すると倒伏し、登熟日数が長びく結果となる。
9. 耐冷性は障害型冷害に対しては「新栄」「栄光」と同程度か、わずかに劣る。ただし多肥栽培したときには不稔粒を発生しやすい。遅延型冷害に対しては「新栄」よりやや弱い。

栽培適地と奨励態度 熟期その他特性から見て、石狩中南部、空知、胆振、日高、後志の良地帯で従来「豊光」が熟期の点で十分安全限界内にあった地帯、および「新栄」の熟期がややおそすぎる地帯に適する。

初期生育が旺盛で多肥にしなくても茎数の確保が容易なので、初期生育の遅延する地帯の普通肥栽培に適する。

耐倒伏性もあまり強くなく、多肥による不稔も懸念され、しかも普通肥栽培でかなり高い収量をあげうる特徴をもっているので多肥栽培はさける必要がある。又遅延型冷害には弱いので冷水のかかる水田はさけなければならない。(1966年(昭41)廃止)

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 粒 重	1,000 粒 重		
北海道農試	冷床	8. 8	9. 21	152	73	12. 5	23. 7	509	565	844	21. 5	82. 1	1958~ 1961
空知支場	冷床 (空泥炭)	8. 10	9. 28	157	69	16. 4	23. 5	568	450	820	22. 5	81. 4	1959~ 1961
	冷床 (浮植土)	8. 11	9. 24	153	65	14. 7	23. 7	493	360	818	21. 9	82. 3	"
原原種農場	冷床	8. 9	9. 19	145	63	14. 7	19. 7	489	387	833	21. 8	84. 3	1959~ 1961
上川支場	冷床	8. 7	9. 26	157	67	15. 3	22. 0	520	451	848	21. 6	83. 5	1959~ 1960

(7) ユーカラ (北海182号)

来歴 「ユーカラ」は、北海道農業試験場で1953年(昭28)に「関東53号」を母とし「栄光」を父として人工交配を行い、その後は「テイネ」と同一の方法で選抜をくわえた。1958年(昭33)に「札系5819」の系統番号をつけて生産力検定予備試験を実施し、1959年(昭34)「北海182号」の系統名をつけ生産力検定試験を行うとともに、道内の試験機関において適応性を検定、さらに冷水掛流法による耐冷性検定もあわせ行った。1961年(昭36)には、原種決定現地試験によって地方適否をたしかめ、1962年(昭37)優良品種に決定し、農林省に新品種「ユーカラ」(水稻農林138号)と命名、登録された。

特性概要 1.草状は「豊光」と同程度の短稈、穂数は「豊光」とほぼ同じで、穂数型に属し、稈の太さは中程度、剛さは「豊光」「新栄」と同程度でやや剛に属する。穂長は中位、粒着はやや粗、無芒で稈先に着色なく熟色は良好で葉の枯上りは比較のおそい。苗の生育は良く、初期分けつ力はきわめて旺盛である。

この品種の特異的な草状は、穂頭の抽出程度が普通より少なく、出穂揃いでは、穂が出すくんだ状態にみえるので草状はよくない。登熟の進むにつれて穂頭は抽出してくるが、穂頭が太く硬いためにあまり垂れ下がらない。

分けつ数は多いが生育途中葉身があまり垂れ下がらないので、過繁茂になることはさけられる。

2.玄米性状 稈種で粒形はやや長、大きさはやや大、色は中程度の飴色で光沢はごく良で腹白、心白がほとんどなく、縦溝も浅く、粒揃も良く総合的にみて品質はきわめてすぐれている。食味については「栄光」よりもまざっている。

3.熟期 出穂期は「新栄」と同じか、わずかに早く、晩生の早に属する。成熟期は「新栄」にくらべると早い。

4.登熟は穂内・株内ともに整一で、成熟期を判定し易く、道内品種のうちでは上位に位する。

又多肥栽培でも登熟が遅れず整一度も良好であり、屑米も少ない。

5. いもち病耐病性は菌系により異り、N菌に対しては「石狩白毛」よりも強いが、C菌には弱い。
6. 倒伏抵抗性は稈質やや剛で、短稈のため強く、「新栄」程度以上である。
7. 耐冷性は障害型冷害に対してはやや強い方では「新栄」程度である。遅延型冷害に対しては「新栄」より劣るが「栄光」より僅かに強く、中ないしやや弱である。
8. 収量は一般に多収であり、特に多肥、肥沃田での増収がみられる。

栽培適地と奨励態度 空知、石狩、上川中央部、留萌中南部の良地帯で、従来「豊光」程度の熟期の品種が十分安全限界内にあった地帯のうち、晩生種の配合品種として適する。

南部空知、石狩などの現在「新栄」が栽培されていて、収量の上らないところや、多肥栽培で登熟がおくれ良質米の得られない地帯では「新栄」に置かえる。胆振、日高、後志では耐肥性良質品種として他の中晩生品種と配合する。

初期分げつが旺盛なので、石狩および南部空知の一部のごとく、春季の強い偏東風のため初期生育のおくれる地帯にも適する。

多肥栽培に適するが、倒伏、不稔を考慮した場合、過度の多肥施用はさけるべきである。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1穂 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1ℓ重 g	1,000 粒重 g		
北海道農試	冷床	8. 9	9. 22	153	73	15.4	23.5	523	553	848	21.6	82.9	1958～
	標肥												1961
	冷床 多肥	8. 9	9. 22	153	75	16.8	26.8	501	582	835	21.1	81.6	"
空知支場	冷床 (豊栄炭)	8. 10	9. 26	156	66	17.9	22.0	549	443	817	23.4	81.1	1959～
	冷床 (浮植土)	8. 10	9. 23	152	64	16.7	22.2	481	387	820	22.1	80.8	1961
原原種農場	冷床	8. 8	9. 19	146	62	17.1	18.3	483	411	828	22.8	83.6	"
上川支場	冷床	8. 4	9. 23	156	68	16.8	21.3	513	512	840	22.2	83.2	1959～ 1960

(8) しおかり (上育234号)

来歴 「しおかり」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場上川支場で(「目黒栄糯」×「共和」)F₁を母とし「共和」を父として人工交配を行い、それ以来選抜固定をつづけ育成したものである。1958年(昭33)に「上系33」の系統番号をつけ、1961年(昭36)に「上育234号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配付して地方適否を確かめ1963年(昭38)優良品種に決定し、「しおかり」と命名された。

特性概要 1. 成熟期は「ふくゆき」より3日位早く、早生種に属する。

2. 草型は偏穂数型で、中稈、穂長はやや短く、やや強稈で粒着は密、芒性は中の中で、稈先色は黄白である。

3. いもち病耐病性は「ふくゆき」程度ないしはそれ以上で中である。

4. 耐冷性は障害型に対しては「ふくゆき」と同程度のやや強くないし強で、出穂遅延度は「ふくゆき」より僅かに大きいですが、登熟速度が速いので、成熟期は「ふくゆき」より一般に早くなる。

5. 耐倒伏性は「ふくゆき」よりやや強く、道内品種のなかでは中である。

6. 収量は直播栽培、移植栽培ともに「ふくゆき」程度である。

7.玄米はやや円形で小さい。腹白は少なく、光沢良好で縦溝の深さは中位で、品質は「ふくゆき」よりすぐれの中の上で、食味もかなり良い。

栽培適地と奨励態度 上川、留萌および網走支庁管内の「ふくゆき」を栽培している地帯に適しているが、いもち病耐病性および耐倒伏性は中程度なので、多肥栽培には特に注意を要する。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 割 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
上川支場	直播	8. 3	9. 17	125	71	13. 7	32. 7	526	496	832	20. 8	81. 7	1961～ 1962
	冷床	7. 31	9. 26	155	80	13. 6	20. 4	499	475	844	20. 5	80. 6	1961～ 1962
十勝支場	冷床	8. 3	9. 22	149	69	14. 5	14. 2	387	415	818	19. 0	81. 6	〃
北見支場	冷床	8. 5	9. 24	152	64	14. 5	19. 0	501	628	815	19. 4	79. 3	〃
空知支場	冷床 (坪植上)	8. 3	9. 15	146	71	15. 7	23. 4	413	350	815	20. 0	80. 5	〃
	冷床 (壺元炭土)	8. 2	9. 16	148	73	15. 9	20. 0	462	372	832	21. 5	81. 6	〃
原産種農場	冷床	8. 3	9. 16	144	74	16. 2	21. 7	528	433	814	21. 0	83. 3	〃
北海道農試	冷床	8. 1	9. 15	—	—	—	—	430	—	826	19. 5	82. 3	〃

(9) ほうりゅう (空育24号)

来歴 「ほうりゅう」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場上川支場で「新栄」を母とし、「照錦」を父として人工交配を行ったF₂集団を、1959年(昭34)北海道立農業試験場空知支場で譲渡を受け、個体選抜を行ったものである。1960年(昭35)にF₇で系統栽培に移すと同時にいもち耐病性検定試験に供試し、1961年(昭36)に「空系3641」の系統番号をつけ生産力検定予備試験を行った。1962年(昭37)に「空育24号」の系統名をつけて生産力検定試験に供試すると共に、関係試験機関において適応性検定、1963年(昭38)に奨励品種決定本試験、同現地試験に供し地方適否をたしかめ、1964年(昭39)優良品種に決定し、「ほうりゅう」と命名された。

特性概要 1.草状 稈長は「栄光」程度、穂数は「栄光」よりやや多く穂数型、稈の太さは「栄光」程度の中位で剛さはやや柔軟、穂は「栄光」なみでやや長く、粒着もやや密である。芒性は無芒で稃色は黄白、稃先は「新栄」なみの暗褐色を呈する。苗の生育は「ささほなみ」に比べ優り、葉身が伸びやすく柔軟な感じを受ける。初期の分けつ性は「栄光」に比し劣る。出穂後葉身はたれ、穂頸の抽出が大きい。

2.玄米の性状 梗種で形状は中、粒の大きさも中粒であるが豊満、色は「栄光」よりやや濃い飴色を呈し光沢は良い。腹白は極稀、心白は無い。縦溝は「栄光」程度でやや浅い。

3.熟期 出穂期は「栄光」と同程度であるが登熟にはやや長日を要し「栄光」よりわずかに遅く、中生の中に属する。

4.障害抵抗性 いもち病に対しては「新雪」よりやや劣り中位。障害型冷害に対しては「新雪」より劣り、遅延型冷害に対しては「みまさり」程度で両者共中程度である。

倒伏に対しては稈がやや柔軟で穂が垂れ込み弱そうであるが、中肥条件では倒伏の懸念は少なくその程度は中位である。

5. 収量性その他 収量性は「ユーカー」程多収ではないが「栄光」よりまさる。

食味は「新栄」と同程度の良。

栽培適地と奨励態度 空知、石狩、勇払、夕張、日高の「栄光」の栽培されている地帯。

品質がすぐれているので、上記地帯の「イワコガネ」「みまさり」その他雑多な中生種、「栄光」の1部、空知中北部の「新栄」及び晩生種にかえることが望ましい。

耐冷性、いもち病、倒伏性の点から見て冷水地帯、泥炭新田、排水不良田、多肥栽培は避けることが望ましい。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂指 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒 重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
空知支場	冷床 (安産炭)	8. 4	9. 25	157	72	17. 2	21. 5	505	391	829	23. 7	83. 1	1961~ 1963
	冷床 (沖積土)	8. 6	9. 23	156	76	17. 9	19. 7	502	387	842	23. 7	83. 9	1963
北海道農試	冷床	8. 6	9. 23	—	78	14. 3	19. 5	475	—	—	21. 6	—	1962~ 1963
原原種農場	冷床	8. 6	9. 26	154	75	16. 6	23. 5	581	522	811	22. 1	84. 2	"
上川支場	冷床	8. 4	9. 23	152	80	16. 7	23. 0	545	548	826	22. 0	80. 7	"
渡島支場	冷床	8. 4	9. 12	142	100	17. 4	20. 1	528	560	790	22. 1	81. 0	1963~

(10) うりゅう (空育22号)

来歴 「うりゅう」は、1956年(昭31)北海道立農業試験場空知支場において「石狩白毛」を母とし「暁」を父として人工交配を行い、以来系統育種法により選抜固定を計り、1960年(昭35)に「空系3516」の系統番号をつけて生産力検定予備試験を行うとともに、いもち病に対する検定試験を行い、1961年(昭36)に「空系3516-A」の系統番号をつけ、1962年(昭37)より「空育22号」の系統名をつけて地方適否をたしかめ、1965年(昭40)優良品種に決定し、「うりゅう」と命名された。

特性概要 1. 草状 稈長は「ささほなみ」よりやや短い短稈、穂数は中位で中間型、稈の太さは基部は「しおかり」並の太さを有するが上部はやや細く特に穂頭が細い感じを受ける。稈の剛さは「しおかり」なみのやや剛、穂長は「しおかり」なみの中ないしやや長、粒着はやや密で、無芒、稈先色は無く、稈色は黄白で成熟期の熟色は良い。

苗は葉身が短く、葉巾も狭く、葉色は濃く苗質は剛い、初期伸長性はやや劣り「ささほなみ」に類似する。

2. 玄米性状 梗種で中型、中粒で「ささほなみ」「しおかり」よりやや大きい。色沢は「しおかり」程度の鈍銀白で光沢良く腹白は少なく品質は「栄光」程度の良である。

3. 熟期 育成地に於ける出穂期は「ふくゆき」「しおかり」と同時期中生の早に属し、出穂揃は不揃でやや長日を要する。しかし初期生育の良好な地帯では出穂も早まり揃いも良い。

成熟期は初期生育の不良な地帯では遅発分げつ茎が多いため登熟が遅れるが、1穂内の登熟は「ふくゆき」より整一で、従って出穂揃が整一な処では「しおかり」なみの成熟期となる。

4. 障害抵抗性 葉いもち病の抵抗性は中位、耐冷性は障害型、遅延型ともに「ふくゆき」なみで

やや強、倒伏に対しては移植栽培では「ささほなみ」に比べやや劣る強である。しかし直播栽培では細粒となりややなびく傾向を有する。

5. 収量性その他 収量性は栽培環境による変動がやや大きく、「しおかり」に比し泥炭質水田ではやや多収を示すが、埴土質水田では劣る。

直播栽培では「しおかり」なみである。

砂土、ならびに耕土が浅い水田および有機質に乏しい水田等では、登熟後期に葉枯れを来し易い。

搗精歩留は「ふくゆき」に比べ高く碎米も少い。食味は「新雪」に比し佳良で特に冷飯の場合は粘性、食味共に優る。

栽培適地と奨励態度 空知中北部から上川北部地帯とするが、本品種は栽培環境による影響が大きいので、海洋性気象の影響を受ける地帯、砂土、耕土の浅い水田、漏水田等はさけるべきである。

また空知管内における直播栽培用品種として使用可能である。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 ℓ 重	1,000 粒 重		
中央農試	冷床 (金沢炭)	8. 5	10. 1	165	67	17. 3	18. 1	447	290	820	22. 3	82. 8	1962～ 1964
	冷床 (池田土)	8. 6	9. 28	164	66	16. 6	16. 9	365	274	830	21. 5	83. 1	1963～ 1964
	直播	8. 16	—	—	62	14. 6	21. 5	414	409	—	22. 6	79. 8	1962～ 1964
北海道農試	冷床	8. 5	9. 24	—	75	13. 8	17. 3	429	—	—	21. 0	—	〃
上川農試	冷床	7. 30	9. 16	146	69	16. 3	23. 0	502	448	854	—	82. 3	1963～ 1964
	直播	8. 3	9. 18	140	69	15. 3	39. 0	502	533	843	21. 0	81. 9	〃
原原種農場	冷床	8. 6	9. 27	154	70	17. 3	19. 9	472	458	805	21. 7	83. 2	1962～ 1964

(11) きよかぜ (上育254号)

来歴 「きよかぜ」は、1956年(昭31)北海道立農業試験場上川支場で「新栄」を母とし「水稻農林15号」を父として人工交配を行い、それ以来、耐冷、良質、極早生を目標として選抜固定をつづけ育成したものである。1962年(昭37)に「上系36—355」の系統番号をつけ、1963年(昭38)に「上育254号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめたものである。1965年(昭40)に優良品種に決定し、「きよかぜ」と命名された。

特性概要 1. 出穂期は「農林15号」より2～3日遅く、成熟期は大差なく極早生種である。
2. 草型は中間型で、中稈、穂長はやや長く、稈はやや弱く粒着はやや密、芒性のごく稀にごく短芒があり、稈先および芒は黄白である。
3. いもち病耐病性は、葉、穂頸いもち病ともに「農林15号」と大差なく弱である。
4. 耐冷性は障害型に対しては、「ふくゆき」とほぼ同程度でやや強で、「農林15号」よりかなり強い。遅延型に対しては、「農林20号」程度の中で、「農林15号」よりやや弱い。

5. 耐倒伏性は「農林15号」よりやや強いが「農林20号」より弱くやや弱である。
6. 収量は「農林15号」より安定して多収である。しかし、極端な多肥栽培では耐倒伏性が弱いために、「農林20号」より減収する場合がある。
7. 玄米は、形状および大きさともに中位で、腹白はやや少なく、稀に心白がある。光沢はやや良で、縦溝の深さは「農林15号」より浅い。品質は「農林15号」より優り、食味は「農林20号」とほぼ同程度である。

栽培適地と奨励態度 上川、留萌支庁管内の北部および中央部の山間地帯ならびにこれと類似の地帯で「農林15号」およびこれと同程度の熟期の品種を栽培している地帯に適している。しかし、いもち病耐病性および耐倒伏性はともに弱いので、多肥栽培は絶対に避け、普通肥ないしやや少肥で栽培することが望ましい。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					穂長 cm	穂長 cm	1 穂 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 穂 重 g	1,000 粒 重 g		
上川農試	直播	8. 1	9. 9	118	63	15.8	38.0	389	530	840	19.6	82.2	1964～
	冷床	7.28	9. 9	128	72	17.6	21.0	455	446	847	20.8	80.2	1963～ 1964
十勝農試	直播	8.12	達せず	—	62	15.4	21.8	106	614	808	17.1	73.1	1964
	冷床	7.31	(9.28)	(157)	70	17.3	16.7	(456)	451	810	20.2	83.0	1962～ 1963
北見農試	直播	8.17	達せず	—	—	—	—	100	788	702	14.8	56.0	1964
	冷床	8. 3	達せず	—	75	16.2	16.2	389	577	801	18.1	77.0	1962～ 1964

(12) ほくせつ（上育265号）

来歴 「ほくせつ」は、1963年（昭28）北海道立農業試験場上川支場で「新栄」を母とし「上育161号」（「大田早生」×「福福」）を父として人工交配を行い、その後、F₁ 種子を3年間貯蔵し、それ以来、耐冷、耐倒伏、良質に重点を置き選抜固定をつづけ育成したものである。1962年（昭37）に「上系130」の系統番号をつけ、1963年（昭38）に「上育265号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめたものである。1966年（昭41）に優良品種に決定し、「ほくせつ」と命名された。

- 特性概要 1. 出穂期は「栄光」「新雪」と大差なく「ほうりゅう」よりは1両日遅い程度である。成熟期は「栄光」と大差なく中生種である。
2. 草型は穂数型で、穂長は「栄光」「ほうりゅう」と大差なく中稈、穂長は「新雪」よりも短い。
3. 粒着は中程度で、芒性は稀に極短芒があり、稃先色は黄白で葉の枯上りはきわめて少ない。
4. 登熟は「新雪」よりやや遅いが、「栄光」「ほうりゅう」よりは良好である。
5. いもち病耐病性は、葉、穂頭いもちのいずれに対しても「栄光」程度で「ほうりゅう」よりはやや強い。しかし、「新雪」よりは弱く中である。
6. 稈質は「新雪」程度でやや強く、耐倒伏性は、「栄光」「ほうりゅう」より強くやや強である。
7. 耐冷性は、障害型に対しては「新雪」よりやや強く極強で、「栄光」「ほうりゅう」よりかなり強い。

8. 収量は特に高くはないが、比較的安定した収量性を示し、地力のあるところでは僅かながら「ほうりゅう」を上回る。

9. 玄米、形状は中で「栄光」「ほうりゅう」と同程度、粒色は飴色を呈し光沢は良好で腹白は少ない。縦溝は「ほうりゅう」と大差ないが「栄光」よりやや浅く、品質は「ほうりゅう」程度である。食味は「ユーカラ」「ほうりゅう」と大差なく良い。

栽培適地と奨励態度 「栄光」「新雪」「豊光」などと同熟期の品種に配合または代えて栽培でき、上川支庁管内の中、南部、留萌支庁管内の南部、空知支庁管内の全域およびこれと類似の地帯に適している。特に、比較的地力の高い肥沃地帯に好適であるが、いもち病の常発地帯は除く。
〔1972年（昭47）廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 株 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 ℓ 重 g	1,000 粒 重 g		
上川農試	直播	8. 12	9. 30	139	67	12. 7	37. 0	468	557	838	20. 4	81. 3	1964～ 1965
	冷床	8. 11	10. 1	161	72	14. 6	25. 0	508	560	821	20. 5	81. 8	〃
原原種農場	冷床	8. 13	(9. 28)	(156)	74	15. 4	20. 0	497	600	797	21. 4	82. 7	1963～ 1965
中央農試	冷床 (委託)	8. 14	10. 5	165	68	15. 2	20. 0	473	359	805	22. 4	82. 9	1963～ 1965
	冷床 (神橋土)	8. 18	10. 6	165	70	14. 5	19. 1	410	370	805	21. 0	82. 5	1964 1965
北海道農試	直播	8. 20	10. 9	145	(69)	(13. 6)	(28. 5)	346	546	—	20. 1	81. 4	1963～ 1965
	冷床	8. 15	10. 5	163	(76)	(13. 5)	(21. 3)	443	560	—	20. 6	82. 8	〃
道南農試	冷床	8. 8	9. 24	155	69	14. 6	20. 2	405	—	—	20. 7	82. 3	1964 1965

注) () 内は達せざる年を除く

(13) ひめほなみ（空育39号）

来歴 「ひめほなみ」は、「ヤチミノリ」の良質強稈化を目的として、1958年（昭33）に北海道立農業試験場空知支場において「空系26号」（「関東53号」×「栄光」）を母とし「ヤチミノリ」を父として人工交配を行い、以来世代短縮と系統育種法により選抜固定をはかった。1962年（昭37）に「空系37A19」の系統番号をつけて生産力検定予備試験を行うとともに、いもち病に対する耐病性検定を実施し、1963年（昭38）より「空育39号」の系統名をつけて各試験機関で地方適否を検定した。1964年（昭39）より奨励品種決定現地試験において現地における適否を調べ、1966年（昭41）優良品種に決定し、「ひめほなみ」と命名された。

特性概要 1. 草状 稈は短稈でやや細く「ユーカラ」なみで剛さは中位である。穂は短く、粒着は密で無芒、稈および稈先色は黄白で成熟期の熟色はやや良好である。草型は穂数型である。

苗は葉身やや短かく、伸長力は小さい。葉巾は中位、葉色はやや淡緑で草状はやや直立型である。育苗は概ね容易で、初期の分けつ性は旺盛であるが伸長力は「ほうりゅう」程度で小さい。

2. 玄米性状 梗種で形状はやや円く、粒大はやや小、色沢は鈍銀白で「栄光」よりやや淡い。

光沢は良好で腹白少なく稀に心白がある。品質は良である。

3. 熟期 出穂期は「栄光」より1～2日遅く「ユーカー」より2～3日早い、中生の晩に属し穂揃性は良好である。成熟期は「栄光」に比べやや遅く、登熟日数は「栄光」と同程度である。

4. 障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性は「新雪」よりやや弱くやや強に属する。なお「ユーカー」と比較した場合N菌だけの分布下では劣るがC₁菌の存在下でははるかに強い。

耐冷性は、冷水掛流し検定結果から、障害型に対しては「新雪」よりやや劣り「栄光」程度でやや強に属し、ほ場における不稔の発生は、比較品種に比しいずれの条件でも少なかった。遅延型に対しては「栄光」よりやや強く「新雪」程度の中に属する。

耐倒伏性は「新雪」程度のやや強に属する。

葉の枯上りは普通土壌条件で葉枯れの大きい処では「栄光」に次いで多く、登熟後期に多くあらわれる。

5. 収量その他 標準肥では比較品種に比し多収を示し、極端な多肥栽培では、稈質、登熟が劣るため「新雪」「ユーカー」より減収する。土壌条件としては普通土壌より泥炭質土壌が収量性で優り、ことに砂土および普通土壌の耕土の浅い水田、有機質の乏しい水田では登熟後期に葉枯れをきたしやすく、登熟に悪影響をきたすため劣るものと思われる。

栽培適地と奨励態度 本品種の適応地帯は、空知、上川、石狩などの道中央部およびこれに類似の地帯でいもち病の発生しやすい地帯（泥炭地）に多く栽培されている「新雪」「ユーカー」あるいは「ほうりゅう」などにかえて栽培する。

本品種は初期分けつがよく、普通肥栽培に適しているので多肥栽培は避けること。

（1974年（昭49）廃止）

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a 当り		玄 米		収 歩 合 %	試 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 株 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 ℓ 重 g	1,000 粒 重 g		
中央農試	冷床 (豊後土)	8.13	10. 6	166	64	14.7	25.1	488	303	797	21.2	82.8	1962～ 1965
	冷床 (沖積土)	8.16	10. 7	166	62	13.8	23.7	445	326	798	20.2	81.0	"
北海道農試	冷床	8.13	10. 4	—	68	12.7	28.2	432	—	—	19.5	—	1963～ 1965
上川農試	冷床	8. 8	9.26	156	70	14.6	29.0	517	500	(802)	20.3	81.1	"
原原種農場	冷床	8.12	9.30	156	66	14.3	27.4	499	484	786	19.9	82.6	"
道南農試	冷床	8. 7	9.26	157	62	14.5	25.7	430	—	—	19.9	—	"

(14) はつとかち（十育7号）

来歴 「はつとかち」は、1956年（昭31）北海道立農業試験場上川支場において「新栄」を母とし「水稻農林15号」を父として人工交配を行い、1958年（昭33）にF₂集団で同十勝支場が譲り受け、F₄で個体選抜、F₅以降系統選抜法により選抜固定をはかった。1962年（昭37）に「十系6203」の系統番号をつけ生産力検定予備試験、1963年（昭38）以降は「十育7号」の系統名をつけて生産力検定試験を行うとともに、道内各試験機関で適応性検定ならびに特性検定試験を併せ行い、さらに1964年（昭39）から奨励品種決定現地調査を行い地方の適否をたしかめ、1966年（昭41）優良品種に決定し、「はつとかち」と命名された。

特性の概要 1.草状 稈長は長、穂数は「農林20号」と同程度の偏穂重型に属す、穂は長く、粒着はやや密で無芒、稃ならびに稃先色は黄白色である。葉身の枯上りは「農林20号」より若干早目である。

2.玄米の形状 梗種で形状は長粒、粒大は中の部に属す、淡飴色で腹白、心白共に少く品質は中の上である。

3.熟期 出穂期は「農林20号」と大差なく「しおかり」に比べると2～3日早く十勝地方では中生の中に属する。成熟期は「農林20号」に比し若干遅く、「しおかり」と同程度である。

4.障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性は「農林20号」より強いが総合判定の結果はやや弱、耐冷性は冷水掛流し検定の結果障害型に対しては中、遅延型に対しては中ないしやや強に属する。倒伏については「農林20号」と同程度で中に属する。

5.収量性 「農林20号」よりも安定多収である。

栽培適地と奨励態度 十勝支庁管内の全地帯の「農林20号」その他晩生種におきかえる。

本品種は長稈で耐冷性中、いもち病やや弱なので、冷水田、多肥栽培はさけ、いもち病防除に十分留意すること、又特性、収量性から見て穂数確保のため移植本数を増し安全確収につとめる事が望ましい。〔1969年（昭44）廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a 当り		玄 米		傾摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1穂 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1ℓ重 g	1,000 粒重 g		
十勝農試	冷床	8. 7	9. 27	156	75	17.4	16.6	337	450	815	20.8	80.8	1962～ 1965

(15) そらち（空育51号）

来歴 「そらち」は、1960年（昭35）「みまさり」の良質化を目標に北海道立農業試験場空知支場で「空育12号」（「関東53号」×「栄光」）を母とし「みまさり」を父として人工交配を行い、以後世代促進法により育成された。すなわち1960年（昭35）冬期温室でF₁養成、1961年（昭36）春温室でF₂集団、同年秋鹿児島晩期栽培でF₃、同年冬期温室でF₄集団を養成して穂選抜を行った。1962年（昭37）穂別系統として系統栽培に移し、1963年（昭38）「空系38C34」の系統番号をつけて生産力検定予備試験に供試すると同時に特性検定試験に編入、更に1964年（昭39）「空育51号」の系統名をつけて生産力検定試験に供試するとともに、道内試験機関において適応性を検定、1965年（昭40）奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に編入して地方適否を確かめ、1967年（昭42）優良品種に決定し、「そらち」と命名された。

特性概要 1.草状 稈は「栄光」より短いやや短稈。太さはやや細く、剛さは中位、穂は「栄光」なみのやや長穂で粒着は「ほうりゅう」よりもやや疎の中位である。芒は無く、稃色ならびに稃先色は黄白、穂数は「栄光」より多く穂数型に属する。

2.玄米性状 梗種で形状は中、粒大も中位で「ほうりゅう」なみである。

色沢は「栄光」より淡い飴色を呈し鈍銀白で光沢はやや良。腹白・心白は共にみられず溝は浅い。品質は「栄光」よりやや劣り上の下。

3. 熟期 出穂期は「栄光」「ほうりゅう」なみで穂揃は良好である。成熟期は「栄光」なみで中生の中に属する。

4. 障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性はC菌の存在下では「さきはなみ」なみのやや強、N菌系のみでは「ユーカラ」に近い耐病性を有する。耐冷性は障害型に対しては極強、遅延型に対しては中の抵抗性を示す。

耐倒伏性は「栄光」なみのやや弱であるが稈が柔軟なためなびく様相で倒伏する。

5. 収量性 年次、地域的な変動が少なく多収である。

栽培適地と奨励態度 「栄光」「ほうりゅう」等の中生種が作付されている道内各地帯に適応し、安全確収の中核的品種として作付させる。尚中晩生種地帯の冷水田にも適応する。倒伏性から見て多肥栽培はさける。

試験場名	苗代様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 穂 本数	玄米重 kg	稈重 kg	1 穂 重 g	1 穂 粒重 g		
中央農試	冷床 (平壌上)	8.16	(10. 8)	167	68	15.8	22.6	453	—	800	22.6	83.9	1964～ 1966
	冷床 (平壌上)	8.16	10. 5	164	66	15.3	22.7	465	—	804	21.4	82.0	1964～ 1965
北海道農試	冷床	8.14	10. 2	159	67	14.5	25.6	476	536	—	21.2	82.4	1964～ 1966
上川農試	冷床	8.13	9.26	160	71	16.6	26.5	552	623	803	21.4	80.0	"
原原種農場	冷床	8.15	10. 3	161	67	16.5	23.9	438	483	798	20.9	82.4	"
道南農試	冷床	8.12	9.28	—	73	16.8	20.9	413	—	—	22.6	—	1965～ 1966

(16) 照 稔

来歴「照稔」は、北見市屯田町、江頭利雄氏の育成によるもので、1953年(昭28)に「照錦」の中より稔実良好な一株を選抜したことに始まる。翌年に一本植栽培を行い、分離した白毛と赤毛の中から良好なものを1959年(昭34)まで繰り返し選抜を行い、赤毛の後代より混りを除いたものを「照稔」と命名した。

1963年(昭38)に現地を含めて予備的に生産力を検定した。翌年、道内の関係試験機関において生産力検定並びに特性検定試験を行い適応性を検定し、1965年(昭40)より奨励品種決定調査および現地調査を行って地方適否を確かめ、1967年(昭42)優良品種に決定した。

特性概要 1. 稈長は、「しおかり」よりやや短い中稈。穂数は、「農林20号」より多く「しおかり」と同程度で、草型は、偏穂数型である。穂長は「しおかり」より長く、「ふくゆき」程度で中。粒着は「農林20号」よりやや疎で中程度。芒性は多の長で、稃先色は、成熟期には赤褐色となる。初期生育は「農林20号」程度でよい方である。

2. 玄米の性状については、形状は「農林20号」程度の中、粒大は「農林20号」より大きく、やや大、色沢は銚色の程度は少なく銀白に近い。光沢は「ふくゆき」よりよいが中程度で、平年では腹白が多く、品質は「ふくゆき」よりやや良いが中の下に属する。食味は江頭氏によれば、「ふくゆき」よりもよいとされている。

3. 出穂期は、「しおかり」に比べやや早い、北見地方では晩生の早に属する。登熟は、「しお

かり」に劣らず良く、成熟期では中生の晩に属する。

4. 耐冷性は、障害型に対しては「しおかり」程度でやや強とみられる。

5. いもち病抵抗性については、「しおかり」に比べいくらか強いようではあるが中に属する。葉いもち病に対しては「しおかり」よりも強い。

6. 倒伏性については、「しおかり」程度である。

7. 収量性については、初期生育もよく登熟も早いので、平年以上の年ではかなりの収量性を示す。一方、下葉の枯上りが早く、多肥にすると穂揃が悪く、いわゆる「ボケ」易く、好天の場合には葉は垂れ過繁茂の型になり易い。

栽培適地と奨励態度 網走支庁管内において、「ふくゆき」が栽培されている地帯と「しおかり」が遅すぎる地帯およびこれに準ずる地帯に適する。

栽培上の注意としては、1. 登熟が良好な系統ではあるが、北見地方の出穂の早晩では限界に近いものであるから、作付割合が多くならないようにする。2. 耐冷性は、「しおかり」程度で著しく強いものではなく、低温時には多肥で不稔が多発し、生育も遅延するので多肥栽培はさけること。3. 収量性の項で記したごとく、多肥栽培では玄米品質を低下させることがあるので充分注意すること。〔1971年（昭46）廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北見農試	冷床	8. 14	(9.22)*	(116)*	67	16.5	17.0	326	733	796	19.9	77.8	1963～ 1966
上川農試	冷床	8. 8	9. 24	156	70	17.8	21.0	477	498	818	22.5	82.0	1964～ 1966
十勝農試	冷床	8. 15	(9.30)**	(155)**	67	17.6	19.3	367	609	803	21.2	75.8	”

・は3ヶ年平均、**は2ヶ年平均。

(17) かちほなみ（十育12号）

来歴 「かちほなみ」は、1953年（昭28）北海道立農業試験場上川支場において（「豊光」×「大雪」）を母とし「上育161号」を父として人工交配を行い、その後F₁種子を2年間貯蔵し、1956年（昭31）F₁養成を行い、1958年（昭33）、「上28交15」の交配番号のF₂集団を同十勝支場が譲り受け、F₂で個体選抜したものである。1962年（昭37）に「十系6201」の系統番号をつけて生産力検定予備試験を行い、1963年（昭38）～1964年（昭39）に生産力検定試験を行った。1965年（昭40）以降は「十育12号」の系統名をつけて道内各試験場機関で適応性検定試験ならびに特性検定試験を行うとともに、奨励品種決定現地調査により、地方の適否を確かめ、1968年（昭43）優良品種に決定し「かちほなみ」と命名された。

特性概要 1. 草状 苗代、本田共にあまり伸長せず、本田においては比較的早期に分げつを始め、旺盛で初期の生育は良好である。稈長は短くやや短に属し、稈はやや細く剛柔性は中で「ふくゆき」と同程度であるがより柔軟性に富む。穂長はやや短、穂数は多く穂数型である。芒は無芒で粒着はやや密に属し、稈色、稈先色共に黄白で成熟期の熟色は良好である。

2. 玄米の性状 梗種で形状は「しおかり」と同じかやや円で粒大はやや小に属する。腹白中、心白は少なく色沢はやや良であるが、胴切米、不整形米が若干多い。

3. 熟期 出穂は「しおかり」と同程度の中生の晩、成熟期は中生の中に属し、冷害年における登熟は「ふくゆき」「しおかり」より若干早まる傾向がみられる。

4. 障害抵抗性 いもち病の耐病性は「農林20号」なみの弱に属する。耐冷性障害型に対しては「しおかり」「はつとかち」より強い強に属し、遅延型に対しては「ふくゆき」なみのやや強くない中に属する。耐倒伏性は「しおかり」なみの中に属するが、短稈で柔軟性があるので完全倒伏は少ない。

5. 収量性 多収で年次間における変動も少なく収量は安定している。

栽培適地と奨励態度 十勝管内、網走管内、上川北部およびこれに準ずる地帯。

耐冷性はなお不十分であり、いもち病には弱く、胴切米の発生は多いので充分注意して栽培する事が必要である。

試験場名	苗代 様式	出穂期		生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
		月日	月日		稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
十勝農試	冷床	8. 9	9. 25	153	69	15. 4	22. 6	382	502	821	20. 1	79. 8	1962～ 1967
北見農試	冷床	8. 13	10. 1	160	68	13. 4	23. 5	379	643	837	—	81. 0	1965～ 1967
上川農試	冷床	8. 6	9. 22	154	76	15. 2	30. 0	520	552	837	19. 9	80. 7	"

(18) はやゆき (北育33号)

来歴 「はやゆき」は、北海道立農業試験場上川支場で、1956年(昭31)に「新栄」を母とし、「農林19号」を父として人工交配を行い、F₂まで上川支場で集団養成したものを、1960年(昭35)に同北見支場がF₂集団として譲り受け、早熟、耐冷、良質を目標にして、1962年(昭37)に個体選抜を行い、以来選抜固定をはかったものである。1964年(昭39)「北系3901」の系統番号を付け、翌年には「北育33号」の系統名を付けて生産力検定試験を行うとともに、道内の関係試験機関において適応性検定および特性検定を併せて行い、1966年(昭41)より現地調査によって地方適否を確かめた。1968年(昭43)優良品種に決定し、「はやゆき」と命名された。

特性概要 1. 稈長は、「農林19号」「農林20号」より長く、長稈に属する。穂数は、「農林20号」並で、草型は中間型。穂は、「農林20号」よりやや短い中位である。粒着は中位。芒性は、少の短で稈先色は黄白。初期生育は「農林20号」よりは劣るが、良い方である。

2. 玄米性状については、形状は「農林20号」よりいくらか細いの中に属し、粒大は「農林19号」よりやや大きく中である。色沢は、いわゆる飴色は少いが「農林19号」より良く、腹白は「ふくゆき」と同程度ないしは少い。品質は「農林19号」よりいくらか良く中の中に属する。

3. 出穂期は、「農林19号」より遅いが「農林20号」よりわずか早く、北見地方では中生の早。登熟は、「農林19号」よりも良いので、成熟期でも中生の早に属する。

4. 耐冷性は、障害型に対しては、「農林19号」「かんまさり」など同熟期程度の強とされるいずれの品種よりも強く、極強である。

5. いもち病抵抗性は、「農林20号」と同程度で弱に属する。葉いもち病についても「農林20号」程度で弱であり。

6. 耐倒伏性は、長稈で稈質が柔かい方なので「はつとかち」よりは強いが「きよかぜ」「農林20号」

並のやや弱。しかし、長程のわりには倒伏しずらく、なびき型なので、倒伏による障害はある程度補われるものとみられる。

7. 収量性については、低温年には、本系統の耐冷性、早熟性により他の品種に比べ多収をあげ得る。平年以上の年にも、「農林20号」「しおかり」と同程の収量性を期待できる。

栽培適地と奨励態度 網走支庁管内における「農林20号」と「安斉系統」およびこれらと同程度の熟期のを栽培している地帯、「ふくゆき」「照稔」「しおかり」が遅すぎる地帯に適し、これら品種、系統に替えて、または配合種として栽培できる。

十勝および上川支庁管内や留萌支庁管内北部の低温冷水地帯、その他の支庁管内でも上記に類似した地帯は同様である。

栽培上の注意としては、長程で倒伏しやすい性質であること、いもち病に対しても弱なので多肥栽培は極力さけると共に、いもち病防除は「農林20号」に準じて十分に行うこと。また、草型が中間型で穂数が少なざみになる場合があるので、この場合、出来るだけ栽植株数または本数を多目にして増収を計ることが必要である。(1975年(昭50)廃止)

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		収 割 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1株 穂数	玄米重	稈重	1ℓ重	1,000 粒重		
		日 月	日 月	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
北見農試	冷床	8. 8	9. 23	153	77	15.3	15.8	407	499	826	20.0	82.1	1964～ 1967
上川農試	冷床	8. 4	9. 20	149	88	17.0	20.0	460	477	824	21.2	80.6	1965～ 1967
十勝農試	冷床	8. 6	9. 23	149	79	17.3	17.6	371	429	817	21.2	81.5	"
北見農試	直播	8.15	—	—	79	14.2	23.3	378	435	822	19.2	79.8	1970～ 1971
上川農試	直播	8. 3	9. 19	127	82	14.1	34.0	447	496	815	21.2	80.8	1965～ 1967

(19) シモキタ (ふ系56号)

来歴 「シモキタ」は、1954年(昭29)青森県農業試験場藤坂試験地において「ハッコウダ」を母とし(「Pi」×「水稻農林29号」F₁)を父として三系交配を行い選抜固定をはかり、1962年(昭37)農林省に新品種「シモキタ」(水稻農林141号)と命名、登録されたものである。1963年(昭38)青森県農業試験場藤坂試験地より種子の分譲を受け適否を検討した結果、1968年(昭43)優良品種に決定した。

特性の概要 1. 草状 稈長は「巴まさり」よりも低いやや短稈種でやや細く、穂数は「巴まさり」よりやや少な目の偏穂数型で、稈の剛軟はやや剛である。穂長は「巴まさり」なみの長、粒着密度は中で、無芒、稈ならびに稈先色は黄白である。

2. 玄米性状 稈種で形状は「巴まさり」と同じ中、粒大は中粒、色沢はやや銀白色で光沢は中、腹白は中位で品質は「巴まさり」と同程度の中の上である。

3. 熟期 出穂期は「巴まさり」より3～4日遅く、成熟期は2～3日遅い晩生種である。

4. 障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性は既存品種の中では最も強く、耐倒伏性もあきらかに強い。耐冷性は障害型冷害に対しては「南榮」程度の中、遅延型冷害に対してはやや強に属する。

5. 収量その他 普通栽培では「南榮」「巴まさり」よりやや多収であるが、密植、熟苗等の条件

下では多収を示す。

栽培適地と奨励態度 道南地方の良地帯で「巴まさり」が安全に栽培可能な地帯。

熟期の遅い品種なので、熟期の遅れる様な栽培法はさける事が必要で、熟苗等の利用をすべきである。〔1971年（昭46）廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
渡島支場	冷床	月日 8. 14	月日 10. 4	日 166	cm 74	cm 17. 2	本 21. 4	kg 512	kg 491	g 827	g 20. 8	% 83. 5	1965～ 1967

(20) マツマエ（北海222号）

来歴 「マツマエ」は、1961年（昭36）北海道農業試験場において「ふ系51号」を母とし、「北海183号」を父として、人工交配を行い、F₁短日処理、1963年（昭38）鹿児島県立農業試験場に依頼、F₃、F₄世代を経過、1964年（昭39）穂別系統とし、F₅以降系統栽培にうつし、選抜固定をはかった。1966年（昭41）「札系6632」の系統番号をつけ生産力検定、系統適応性検定、特性検定試験に供試した結果、1967年（昭42）「北海222号」の系統名をつけて関係機関に配布して地方適否を検討した。1968年（昭43）から奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に供試した結果、1970年（昭45）優良品種に決定し、農林省に新品種「マツマエ」（水稻農林209号）と命名、登録された。

特性概要 1.草状 稈長は「南榮」より短い中、稈の太さはやや太く剛い。穂数は「南榮」をみないしやや多の偏穂数型に属する。穂長はやや長、粒着密度は中で極稀に短芒を有し、稈色は黄白、稈先色は淡褐色で脱粒性は難である。葉長は長く、葉巾も広く厚い感じで止葉も長く巾も広く穂の上に直立する。

2.玄米の性状 梗種で形状は中、粒大は「南榮」より大きく大粒に属する。餡色を呈し、光沢は良好で腹白は極めて少なく、品質は「ユウカラ」なみで良好。食味は「南榮」よりやや劣り、中の上である。

3.熟期 出穂期、成熟期は「南榮」なみの晩生種であるが奨励地帯の道南地帯では中生種に属する。

4.障害抵抗性 いもち病耐病性は強と観察される。障害型耐冷性はやや強、耐倒伏性は強に属する。

5.収量その他 耐病性、稈質等の面から見て安定性が高く多収である。少肥栽培では穂数が少なく少収となり易い、又生育後半に肥料切れすると葉枯れが多くなる欠点がある。

栽培適地と奨励態度 渡島半島南部で「南榮」程度の晩生種を安全に栽培し得る地帯に適する。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北海道農試	冷床	月日 8. 18	月日 10. 11	日 170	cm 68	cm 16. 3	本 20. 0	kg 457	kg 660	g —	g 23. 3	% 81. 5	1966～ 1969
道南農試	冷床	月日 8. 8	月日 9. 28	日 162	cm 73	cm 18. 5	本 18. 1	kg 531	kg 472	g —	g 24. 7	% 81. 6	〃

(21) なるかぜ (上育314号)

来歴 「なるかぜ」は、1960年(昭35)北海道立農業試験場上川支場で「北海182号」(「ユーカラ」)を母とし「ささほなみ」を父として人工交配を行い、同年冬期間に温室でF₁を、翌年F₂を集団として養成し、F₃を再度、冬期温室において世代促進を行い、それ以来、早熟耐冷性、良質に重点を置き選抜固定をつづけ育成したものである。1963年(昭38)に「上系173」の系統番号をつけ、1964年(昭39)に系統栽培において分離系統を選抜し、1965年(昭40)に「上育314号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめたものである。1970年(昭45)に優良品種に決定し、「なるかぜ」と命名された。

- 特性概要 1.出穂期は「ふくゆき」並で早生種の晩、成熟期は「農林20号」より1両日早い。
 2.草型は穂数型で、穂数は「ふくゆき」並、稈長は「ささほなみ」並でやや短程、穂長は「しおかり」程度でやや短い。
 3.粒着は中程度で、芒性は無芒、稈色、稈先色は黄白である。
 4.登熟は、多肥栽培で「農林20号」「うりゅう」よりやや早まり、葉枯れは遅く登熟性は極めて良好である。
 5.いもち病耐病性は、抵抗性遺伝子pi-aを持っていると推定され、C₃およびN₄菌には強く、葉、節、穂頭および枝梗いもちの圃場抵抗性では「うりゅう」よりやや強く、中である。
 6.短程で葉枯れが遅く耐倒伏性は「うりゅう」よりやや弱く、「かちほなみ」「しおかり」程度で中である。
 7.障害型耐冷性は「ふくゆき」より強く、「しおかり」程度かまたはやや強く、やや強である。
 8.玄米は、形状は中で「ささほなみ」に類似、粒色はやや飴色、光沢は良好で腹白は少ない。粒張りが良く縦溝は浅く、品質は「農林20号」「しおかり」並で、搗精歩合は「しおかり」並である。食味は「しおかり」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 玄米品質不良の「ふくゆき」「照稔」「かちほなみ」の早生種が栽培されている網走支庁管内および十勝支庁管内の良地帯並びに上記品種に加えて熟期的に不安定な「うりゅう」「しおかり」が栽培されている上川、留萌支庁管内の中北部、山間地帯および空知、石狩、後志、胆振、日高支庁管内の早生地帯に適しており、これらの品種の全てまたは一部に代える。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 匁重	1,000 粒 重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
上川農試	直播	8. 8	9. 23	131	62	14.3	38.0	520	539	799	22.0	83.0	1968～ 1969
	冷床	8. 4	9. 20	120	66	16.0	29.0	529	456	816	21.6	80.8	1965～ 1969
北見農試	冷床	8. 3	9. 25	159	61	15.8	26.0	509	540	826	21.9	80.1	1967～ 1969
十勝農試	冷床	8. 2	9. 22	150	65	16.6	23.0	437	376	812	22.1	82.3	〃
原原種農場	冷床	7.31	9. 17	145	64	16.7	24.0	543	382	819	20.0	83.7	〃
中央農試	冷床	8. 5	9. 25	155	66	16.5	24.0	499	405	818	23.4	84.7	〃
北海道農試	冷床	8. 7	9. 25	—	60	14.7	25.0	461	—	—	23.0	—	1968～ 1969

(22) イシカリ (道北1号)

来歴 「イシカリ」は、1960年(昭35)北海道立農業試験場上川支場で「北海182号」(「ユーカラ」)を母とし「空育4号」(「ささほなみ」)を父として人工交配を行い、F₁は同年冬期温室で養成し、F₂~F₄は水田で集団採種を行い、それ以来「空育4号」の良質化を目標に選抜固定をつづけ育成したものである。1966年(昭41)に「上系6679」の系統番号をつけ、1968年(昭43)に「道北1号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめた。1971年(昭46)に優良品種に決定し、農林省に新品種「イシカリ」(水稻農林217号)と命名、登録された。

特性概要 1.出穂期は「しおかり」より2~4日早く、早の晩、成熟期は「しおかり」とほぼ同じである。

2.草型は偏穂数型で、穂数は「しおかり」と「うりゅう」のほぼ中間、稈長は「しおかり」より10cm程度短く短稈である。穂長は「しおかり」より長く、「ささほなみ」程度の長穂である。

3.粒着は「しおかり」「うりゅう」よりやや粗で、芒性は無芒、稃先色は黄白である。

4.登熟は「うりゅう」よりは早く、「しおかり」にはやや劣るが、穂内の登熟進度にはむらが少ない。

5.穂揃いは、標肥栽培では良いが、多肥になり穂数が多くなるとやや乱れる場合がある。多肥栽培での穂揃いの乱れは、成熟期にまで影響し青米の混入を多くすることがある。

6.いもち病耐病性は、「ユーカラ」と同様、真性抵抗性遺伝子 pi-a, pi-k を持つと推定されるが、圃場抵抗性はかなり強く、強と判定され、葉、穂頸いもち共に強い。

7.耐倒伏性は「うりゅう」「しおかり」より数段強く、「ユーカラ」並の強さをもつ。

8.障害型耐冷性は、長期冷水検定、人工気象箱による検定のいずれにおいても、「うりゅう」「しおかり」と同程度のやや強である。

9.玄米は、粒長はやや長く、粒大は「しおかり」「うりゅう」のいずれよりも大きい。粒形は「ユーカラ」と同じで、粒色も「ユーカラ」の飴色に近く、腹白はごく少ない。品質は「うりゅう」にまさり「しおかり」並かそれ以上で「ユーカラ」程度の上の下である。搗精歩留は「しおかり」と同程度か、これよりやや高い。食味は「しおかり」並かこれにややまさる。

10.収量は高位収量地帯において高く、「しおかり」並かそれ以上の多収を示す。年次間の変動

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1株 穂数	玄米重	稈重	1 ℓ 重	1,000 粒 重		
		月 日	月 日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
上川農試	直播	8. 8	10. 2	140	67	15.6	34.0	518	622	801	21.7	81.0	1968~
	冷床	8. 1	9. 23	155	62	17.7	21.0	543	450	816	22.2	83.1	1970
北見農試	冷床	8. 1	(9.21)	(153)	61	17.5	21.0	520	581	820	21.1	81.0	1966~
十勝農試	冷床	8. 3	9. 22	151	61	18.1	19.0	484	451	813	22.4	81.9	1970
原原種農場	冷床	7.30	9. 20	149	64	18.4	20.0	559	446	813	23.2	83.0	"
中央農試	冷床	8. 7	9. 27	157	66	18.2	20.0	508	435	820	21.5	84.7	"
北海道農試	冷床 (豊茂)	8. 6	9. 26	—	61	17.6	21.0	499	—	—	23.0	—	"

注) 表中()は成熟期に達しない年あり。

は少ないが、栽培環境による変動がやや大きく、初期生育が不良な条件における収量低下が大きい。従って、多肥において本来の多収性を発揮する傾向がある。

栽培適地と奨励態度 上川、留萌支庁管内の良地帯における「しおかり」「ほうりゅう」「そらち」「ほくせつ」とその他の中生種にかえる。上川、留萌支庁管内のやや良地帯における「しおかり」の一部にかえる。空知、石狩、後志、桧山支庁管内のやや良地帯における「うりゅう」「しおかり」の全部又は一部とその他の早生晩～中生早品種にかえる。

(23) ゆうなみ (空育87号)

来歴 「ゆうなみ」は、1964年(昭39)北海道立中央農業試験場において(「ユーカラ」×「ささほなみ」)F₁を母として、「ささほなみ」を父として戻し交配を行い、同年冬期間温室でF₁養成、1965年(昭40)鹿児島県農業試験場に委託してF₂、F₃世代を経過、1966年(昭41)穂別系統、F₆以降系統栽培に移して選抜固定をはかった。1967年(昭42)「空系42033」の系統番号をつけて生産力検定試験、特性検定試験を開始し、1968年(昭43)「空育87号」の系統名をつけて関係機関に配布し地方適否を検討した。1969年(昭44)以降奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に供試した結果、1971年(昭46)優良品種に決定し「ゆうなみ」と命名された。

特性概要 1.草状 稈長は「ひめほなみ」よりやや短い短稈、穂数は「ひめほなみ」より少ない穂数型に属する。稈の太さは中ないしやや細く、剛さは「ささほなみ」にちかくやや剛、穂長は「栄光」程度のやや長穂で、粒着はやや密である。芒はなく稈、稈先色は黄白である。苗は形状、生育ともに中程度で葉色はやや濃緑で、本田初期から中期にかけての生育は分けつ力が旺盛で穂数の確保は容易である。

2.玄米の性状 梗種で形状は中ないしやや長く、粒大は中、色沢は鈍銀白で光沢は良好で縦溝は浅い。普通では腹白少、心白極少であるが多肥栽培などで粒が大きくなる場合には腹白、乳白米を発現し易い傾向があり、総合的にみた品質は「ほうりゅう」なみの上の下である。食味は「ほうりゅう」「しおかり」にやや劣る。

3.熟期 出穂、成熟期ともに「しおかり」より1～2日おそく、「ほうりゅう」より2～3日早く、中生の早に属する。

4.障害抵抗性 いもち病に対するほ場抵抗性はやや強、障害型冷害に対しては「しおかり」に

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
中央農試	冷床 (赤土)	8. 6	9. 27	124	64	17. 2	22. 7	558	414	813	23. 5	84. 1	1967～ 1970
	冷床 (赤土)	8. 7	9. 28	126	66	16. 7	24. 3	530	411	819	22. 5	83. 7	1968～ 1970
北海道農試	冷床	8. 3	9. 29	159	61	16. 1	22. 0	518	496	—	23. 4	82. 4	—
上川農試	冷床	8. 1	9. 24	155	61	16. 2	23. 7	572	433	813	22. 7	83. 2	1968～ 1970
	直播	8. 9	10. 3	141	62	14. 6	35. 0	486	589	795	21. 9	80. 3	1969～ 1970
原原種農場	冷床	8. 1	9. 25	154	63	17. 2	24. 2	597	403	812	23. 4	81. 1	1968～ 1970

比しやや劣る中位であるが稔実歩合の低下に比べて減収率は小さい。又冷水田における出穂遅延度は他の中生種より小さい方である。

耐倒伏性はやや強に属する。

5. 収量性その他 初期分けつ力が旺盛で穂数の確保が容易なため、中生の中、晩の品種に比べても同程度の収量性がある。

栽培適地と奨励態度 「ほうりゅう」が安全に作られている空知以南で石狩、空知の良地帯ならびにこれに類似の地域、なお耐冷性が不十分なのでこれら地域においても山間高冷地および太平洋沿岸で障害型冷害を受け易い地帯での栽培は適さない。

障害型耐冷性が中位で、多肥した場合品質、登熟性が低下するので施肥量は注意すること。

(24) きたこがね (北育51号)

来歴 「きたこがね」は、北海道立農業試験場上川支場で、1961年(昭36)、「北海182号」を母とし「上育230号」を父として人工交配を行い、翌年の冬期、温室でF₂を養成、1963年(昭38)には冷水田で集団選抜を行い、翌年、北海道立北見農業試験場で、F₄集団の一部を譲り受け、良質、耐冷を目標に個体選抜を行い、以来選抜固定をはかったものである。1966年(昭41)に「北系4127」の系統番号をつけ、生産力検定、特性検定試験に供試した。1968年(昭43)「北育51号」の系統名をつけ道内関係機関に配布、翌年より関係現地試験にも供試して地方適否を検討し、1973年(昭48)、優良品種に決定し、「きたこがね」と命名された。

特性概要 1. 稈長は、「きよかぜ」よりやや短かく「なるかぜ」程度のやや短稈。穂長は、「しおかり」より僅か長く「はやゆき」と同程度の中位。粒着は中位。穂数は、「しおかり」と同程度で偏穂数型。芒は「しおかり」よりやや短い中芒、稈先色は黄白。

2. 玄米性状については形状は「なるかぜ」程度の中位で、粒大は「なるかぜ」よりやや大きく、やや大。粒色は「しおかり」と同程度で餛色を呈し、光沢は良好。品質は、「しおかり」並で、育成地では上の下。

3. 出穂期は、「はやゆき」より遅く「なるかぜ」程度で北見地方では中生の晩。成熟期は、「農林20号」よりやや遅く「なるかぜ」より2～3日早い中生の中である。登熟性は、「はやゆき」より遅いが「しおかり」「農林20号」並で良好。

4. 障害型耐冷性は、「はやゆき」より弱いが「なるかぜ」よりやや強く、やや強。

5. いもち耐病性は、葉いもち、穂いもちともに、「きよかぜ」「ふくゆき」並の弱。

6. 耐倒伏性は、「しおかり」「なるかぜ」より強く、「うりゅう」並でやや強。

7. 収量性は、初期生育が良く穂数確保は容易であり、登熟良く千粒重が重いため、平年あるいは豊作年には「なるかぜ」「農林20号」程度の収量をあげ、冷害年にはこれらの品種より高収で、収量の年次間変動は少ない。

栽培適地と奨励態度 網走、十勝両支庁管内においては耐冷性と共に初期生育や登熟性の良さが要求される。この系統は、これら両地帯における中生良質品種として「はやゆき」「なるかぜ」「安斉系統」「かちほなみ」「農林20号」およびその他雑多な品種におきかえて栽培しうる。

栽培上の注意としては、1. いもち病抵抗性が弱であるので、常発地帯では十分注意し、各地帯の防除基準にのっとり、完全防除が必要である。2. 耐倒伏性は、「しおかり」より強いが、多肥栽培にするとおくれ穂が多発し登熟不良を招き易く、品質が低下するので多肥栽培はさけ

ること。3. 登熟が早く整一であるが、刈りおくれることによりさび米（茶米）を発生し、品質低下を招き易いので、適期刈りを励行すること。4. 障害型耐冷性は「なるかぜ」並か、やや強いが、「はやゆき」より弱く充分ではないので、深水灌漑による幼穂保護を励行すること。5. 感温性はこの程度の熟期のものとしては中位であるが、分けつ力が旺盛で高位節からも分けつしやすいので、育苗及び本田管理には十分注意する必要がある。6. 良質米の生産と安定した収量をを得るため、栽植本数はやや多目にすることが望ましい。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 割 歩 合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 穂 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 穂重 g	1,000 粒重 g		
北見農試	冷床	7. 31	—	—	59	16. 6	21. 0	519	494	833	22. 2	80. 3	1966～ 1972 *
十勝農試	冷床	8. 2	9. 16	145	59	17. 6	21. 5	476	447	820	22. 4	80. 9	1968～ 1972 *
上川農試	冷床	7. 30	9. 17	148	61	16. 8	23. 0	501	411	821	23. 2	82. 5	1968～ 1972 *
原原種農場	冷床	7. 29	9. 16	144	61	17. 3	22. 3	556	438	827	24. 1	82. 5	1968～ 1972 *
北海道農試	冷床	8. 6	9. 23	—	59	17. 1	27. 0	539	—	—	24. 1	80. 9	1972～

*は1971年を除く。

(25) さちほ（空育97号）

来歴 「さちほ」は、1964年（昭39）北海道立中央農業試験場において、良質、耐病、強稈品種の育成を目的に（「ささほなみ」×「空系1号」）F₁を母とし、「北海190号」を父として人工交配を行い、同年冬期間温室でF₁養成、1965年（昭40）温室でF₂、F₃集団養成、1966年（昭41）鹿児島県農業試験場に委託してF₄、F₅集団を養成、1967年（昭42）F₆で個体選抜、以降系統育種法により選抜固定をはかった。この間F₆集団とF₇系統は場内の穂いもち病常発水田で栽植選抜を加えた。

1969年（昭44）より「空系44049」の系統番号をつけ生産力検定予備試験、特性検定試験に供試、1971年（昭46）「空育97号」の系統名をつけて道内関係機関に配付し、更に1972年（昭47）より奨励品種決定現地調査に供試して地方適否を検討し、1974年（昭49）優良品種に決定し、「さちほ」と命名された。

特性概要 1. 草状 稈長は「ひめほなみ」「ユーカーラ」より若干短い短、太さは中、穂長は「ほうりゅう」なみの中位、穂数は「ほうりゅう」より少い偏穂数型、粒着はやや密ないし中、極稀に極短芒があり、稈先色は黄白である。

苗は葉身やや長狭、やや濃緑色で太さは中。初期生育はやや劣り、葉身はやや垂れる。止葉は小さく角度は中位を示す。後期の枯上りは「ひめほなみ」より少なく中位。

2. 玄米の性状 梗種で長形、粒大は「ユーカーラ」よりもやや大きめの大粒、色沢は淡目で透明度が「ユーカーラ」より優っている。腹白、心白ともに少なく「ユーカーラ」なみ、さび米も少ない良質種である。

3. 熟期 出穂期は「ユーカーラ」より1～2日早く、中生の晩に属するが、登熟は早く良整なので「ほうりゅう」なみの中生の中に属する。出穂変動性は「ユーカーラ」なみのやや大で「栄光」

よりは小さい。

4. 障害抵抗性 いもち病に対するほ場抵抗性はやや強～中位で「ユーカー」のような危険性はない。

耐冷性については障害型では「ユーカー」と同程度の中位、倒伏抵抗性はほぼ「ユーカー」に近いやや強に属する。

5. 収量その他 収量は疎植、普通肥栽培、初期生育不良地帯ではやや劣る場合がみられるが、多肥栽培、多肥密植栽培では多収を示す。これは、稈質、登熟性が優ることと、いもち病の罹病が少ないためと考えられる。又紙筒苗ばらまき移植栽培では安全確収が得られる。

栽培適地と奨励態度 空知、石狩、後志、胆振、日高、道南北部および上川南部の中生種地帯に適する。

初期生育が劣り、茎数の確保が困難なので、健苗の育成、株当り本数を多くし、多肥密植等による茎数の確保をはかるとともに、出穂期に比較して成熟期が早く良整なので刈取適期を失しない様注意が必要である。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 穂 本数	玄米重 kg	稈重 kg	1 穂重 g	1,000 粒重 g		
中央農試	冷床 (密植炭)	8.10	9.27	162	64	16.6	22.0	502	452	824	23.3	82.2	1971～ 1973
	冷床 (疎植土)	8.9	9.26	161	63	15.8	23.0	495	477	818	22.9	82.8	"
北海道農試	冷床	8.11	9.28	155	66	19.0	23.0	493	542	—	23.2	78.7	"
原原種農場	冷床	8.6	9.22	151	65	16.0	20.0	522	479	820	22.8	83.1	"
上川農試	冷床	8.7	9.19	151	67	15.5	20.0	497	464	823	23.2	82.4	1972～ 1973
道南農試	冷床	8.5	9.17	150	71	16.4	23.0	486	445	—	22.2	82.2	1971～ 1973

(26) キタヒカリ (北海230号)

来歴 「キタヒカリ」は、1965年(昭40)北海道農業試験場において「しおかり」を母とし、「ユーカー」を父として人工交配を行い、1968年(昭43)F₃で個体選抜を行い以後系統育種法により選抜固定をはかった。1970年(昭45)から「札系7059」の系統番号をつけ生産力検定試験、および特性検定試験に、また1971年(昭46)には系統適応性検定試験に供試した。1972年(昭47)に「北海230号」の系統名をつけて関係機関に配付して適否を検討した結果、1975年(昭50)優良品種に決定し、農林省に新品種「キタヒカリ」(水稻農林236号)と命名、登録された。

特性概要 1. 草状 稈長は「ほうりゅう」より短く、やや短、稈の太さは中、稈の剛さはやや剛、穂長は「ほうりゅう」と同程度、草型は偏穂数型、粒着密度は中、無芒で稈先色は黄白、脱粒性は難である。苗の葉色はやや濃く、苗代および初期生育は中である。

2. 玄米性状 梗種で玄米の形は中の中粒、色は淡飴色で光沢は良、腹白はわずかにあるが心白はほとんどない。品質は良好であり、食味も「ユーカー」と同程度で良好である。

3. 熟期 出穂は「ゆうなみ」より2日程度遅く、道中央部では中生に属する。成熟期は「ゆうなみ」と同程度で登熟性は良好である。

4. 障害抵抗性 いもち病抵抗性は「ほうりゅう」と同程度の中で障害型冷害に対しては中ないしやや強、遅延型冷害に対してはやや強に属し、耐倒伏性は「ゆうなみ」と同程度でやや強で生育後期の葉枯れはやや多いが登熟への影響は少ない。褐変稈の発生はやや多いが品質への影響は少ない。

5. 収量性その他 収量性は少肥栽培や瘠薄地では穂数確保が難かしく少収となる傾向があるが、多肥栽培（一般栽培程度）や機械移植による密植栽培では比較的多収が得られる。

栽培適地と奨励態度 留萌南部、上川中南部、空知、石狩、後志、胆振、渡島北部、桧山北部の山間冷涼地帯を除く慣行移植栽培および空知、石狩、後志、胆振、日高支庁管内の気象条件良地帯の機械化栽培に適する。

栽植密度（株数・植本数）を多くし穂数の確保につとめると共に、いもち病耐病性、耐倒伏性を考えた場合極端な多肥栽培はさけること、又耐冷性も十分でないので、冷害危険期には深水灌漑を行わなければならない。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北海道農試	冷床	8. 9	9. 28	156	69	17. 2	24. 8	530	600	—	22. 5	80. 8	1970～ 1974
	稚苗	8. 10	9. 23	139	69	15. 2	28. 3	546	582	—	23. 2	81. 1	1972～ 1974
中央農試	冷床 (芝原上)	8. 6	9. 24	157	66	16. 8	22. 4	526	425	834	22. 5	80. 4	1972～ 1974
	冷床 (冷床上)	8. 5	9. 23	155	69	16. 6	24. 5	567	459	824	21. 9	80. 4	〃
	稚苗 (冷床上)	8. 8	9. 25	151	65	15. 2	25. 2	574	515	822	22. 4	80. 2	1974～
原原種農試	冷床	8. 3	9. 20	148	68	17. 0	20. 0	607	—	—	22. 8	81. 5	1972～ 1974
	稚苗	7. 31	9. 15	136	64	15. 9	18. 8	480	410	—	24. 3	82. 8	1974～
上川農試	冷床	8. 3	9. 15	147	66	15. 8	20. 1	480	397	836	22. 1	79. 5	1972～ 1974
	稚苗	8. 7	9. 31	152	67	15. 0	21. 0	506	508	838	22. 6	76. 2	1974～

(27) はやこがね（北育64号）

来歴 「はやこがね」は、1964年（昭39）北海道立上川農業試験場において「北斗」を母とし、「上育272号」を父として人工交配を行い、1966年（昭41）F₂ 種子の一部を北海道立北見農業試験場で譲り受け、F₂～F₄ 世代に、留辺蘂町現地選抜圃や北見農試冷水田にて集団選抜を行い、1969年（昭44）F₅ で個体選抜を行い、以降系統育種法により選抜固定をはかったものである。

1971年（昭46）より「北系4651」の系統番号を付け生産力検定、特性検定試験に供試し、早生、耐冷、良質、耐病などの優点が認められたので、1973年（昭48）「北育64号」の系統名を付けて道内関係機関に配布、翌年より関係現地試験にも供試して地方適否を検討し、1977年（昭52）優良品種に決定し、「はやこがね」と命名された。

特性概要 1. 稈長は「きたこがね」「なるかぜ」並の短稈。穂長は「しおかり」よりやや短く、「かちほなみ」程度の短穂。穂数は「きたこがね」より多く「なるかぜ」程度で穂数型である。稈先には稀に短芒を有し、稈先色は黄白である。

2. 出穂期は、「きよかぜ」より遅く、「きたこがね」などよりわずかに早く、北見地方では中生の早。成熟期は、「きたこがね」と同程度やや遅く、登熟性は、「きたこがね」にやや劣り、中位。

3. 障害型耐冷性は、「かちほなみ」程度の強であり「はやゆき」には劣る。遅延型耐冷性（出穂）は「きたこがね」には劣るが「しおかり」より強い。

4. 葉いもち病抵抗性は、「なるかぜ」にややまさり中位。穂いもち病抵抗性は年次や場所によりふれがあるが「しおかり」よりやや劣りやや弱。

5. 耐倒伏性は、「きたこがね」に劣り「なるかぜ」程度の中位。

6. 玄米性状については、形状はやや円粒で、千粒重は「しおかり」「かちほなみ」よりやや重く中粒である。品質は良好であり、食味は「しおかり」と「きたこがね」の中間で、やや良～中である。

栽培適地と奨励態度 網走、十勝、上川（中部を除く）、留萌中北部、後志山間部、空知および石狩南部で早生種が作付けされている地帯において、成苗手植並びに田植機移植栽培に適する。これら地帯における「しおかり」「かちほなみ」「なるかぜ」および「きたこがね」の一部、その他雑多な品種におきかえることにより、「しおかり」の晩熟、「かちほなみ」の品質、耐倒伏性、「なるかぜ」の品質、および「きたこがね」の品質低下などの欠点が補えるものと考えられる。

栽培上の注意としては、1. 少肥条件では穂数確保が困難な場合もあり、品質向上、収量安定の面から栽植株数は十分確保することが望ましい。2. 耐倒伏性が中、普及見込み地帯は冷害を受け易い地域でもあり、極端な多肥をさけ、各地域の基準施肥量で栽培する。3. 障害型耐冷性は強であるが、出穂期の点から冷害危険期に低温にあう機会が多いため、適期には必ず深水灌漑を励行する。4. いもち病抵抗性は十分ではないので多発の恐れのある地帯では適切な防除が必要である。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 t 重	1,000 粒重		
北 見 農 試	成苗	7. 30	9. 14	146	59	13. 7	24. 5	410	566	812	19. 1	81. 1	1973～ 1976
	中苗	8. 1	9. 18	148	60	14. 0	24. 0	455	540	796	19. 4	80. 8	1974～ 1976
	直播	8. 14	10. 4	137	65	13. 3	29. 0	489	616	773	21. 3	81. 2	1974～ 1975
上 川 農 試	成苗	7. 26	9. 6	137	58	14. 8	25. 0	422	367	836	19. 9	81. 5	1973～ 1976
	稚苗	7. 30	9. 10	132	58	13. 3	23. 0	464	437	338	19. 9	81. 6	1974～ 1976
	直播	8. 2	9. 13	122	53	12. 2	43. 0	432	454	(824)	20. 9	81. 2	"
原 原 種 農 場	成苗	7. 27	9. 14	143	59	15. 3	21. 0	465	358	—	21. 2	82. 4	1973～ 1976
	稚苗	7. 31	9. 20	142	59	14. 9	22. 0	455	430	—	21. 6	82. 4	1974～ 1976
中 央 農 試	成苗	8. 4	9. 24	156	58	13. 8	28. 0	422	393	823	20. 3	82. 3	1975～ 1976
	中苗	8. 3	9. 25	157	58	14. 9	22. 0	413	389	821	20. 8	82. 3	"

(28) ともゆたか (空育103号)

来歴 「ともゆたか」は、1969年(昭44)北海道立中央農業試験場において、早熟、多収、良質を目標に「北海222号」を母とし「道北1号」を父として人工交配を行い、冬期間温室でF₁養成、1970年(昭45)鹿児島でF₂, F₃集団を世代促進し1971年(昭46)F₄を穂別系統で栽培選抜、以後系統育種法により選抜固定をはったものである。1972年(昭47)「空系47136」の系統番号をつけ生産力検定試験、特性検定試験に供試した結果有望と認められたので、1974年(昭49)「空育103号」の系統名をつけ、関係機関に配布、1975年(昭50)奨励品種決定現地調査に供試して地方適否を検討し、1977年(昭52)優良品種に決定し、「ともゆたか」と命名された。

- 特性概要 1.草状 草型は穂数型に属し、秆長は「ゆうなみ」よりもやや長い短秆、太さは中ないしやや細くやや剛い。穂長はやや長で粒着はやや密、稈先色は黄白で、極稀に極短芒を有する。苗の性状は「イシカリ」に類似するが、マツ強度は「イシカリ」よりやや強い。
- 2.玄米の性状 形状はやや長形でやや大粒、粒色はやや濃く、光沢は良好、腹白はわずかにあるが、心白は殆んどない。整粒品質は「イシカリ」と同程度で搗精歩留りは「ゆうなみ」程度、食味は「イシカリ」程度のやや良である。
- 3.熟期 出穂期は「ゆうなみ」より1～2日早く「イシカリ」なみ、成熟期は「イシカリ」より1～2日おそく、中生の早に属する。出穂期の年次変動、低温による出穂遅延度はやや大と考えられる。
- 4.障害抵抗性 いもち病ほ場抵抗性は「ゆうなみ」と同程度、障害型冷害に対しては「イシカリ」に比べればやや弱い「ゆうなみ」よりは強く、やや強くない中に属する。耐倒伏性は「ゆうなみ」と同程度のやや強に属する。籾の褐変現象は「イシカリ」「ゆうなみ」より少ない。
- 5.収量その他 収量は「ゆうなみ」「イシカリ」にやや優り、初期生育不良地帯でも茎数の確保

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a当り		玄 米		収 割 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	10 ³ 粒当り 穂数	玄米重	稈重	1粒重	1,000粒 重		
中央農試	成苗 (泥炭土)	8. 1	9. 23	156	61	17. 2	457	537	(373)	836	23. 4	82. 7	1973～ 1975
	成苗 (沖積土)	8. 2	9. 25	159	64	17. 1	526	543	484	834	22. 5	82. 3	1974～ 1976
	中部農試 成苗 (泥炭土)	8. 6	9. 29	161	58	16. 6	515	510	476	820	23. 0	82. 3	1975～ 1976
	中部農試 成苗 (沖積土)	8. 10	1976年 達せず	—	60	15. 3	637	543	426	837	22. 9	82. 0	1974～ 1976
上川農試	成苗	8. 1	9. 14	146	59	15. 3	513	514	418	841	21. 8	82. 4	1974～ 1976
	稚苗	8. 3	9. 19	141	56	14. 0	577	513	517	841	21. 3	83. 3	1975～ 1976
原原種農場	成苗	7. 31	9. 19	149	61	16. 5	456	552	424	—	23. 0	83. 6	1974～ 1976
	稚苗	8. 8	10. 1	153	58	15. 9	632	473	486	—	22. 5	81. 1	1975～ 1976
道南農試	成苗	8. 3	9. 18	152	67	16. 7	445	494	420	822	22. 0	82. 5	1974～ 1976
北海道農試	稚苗	8. 6	9. 25	152	70	16. 6	536	530	466	829	22. 5	79. 9	1975～ 1976
	成苗	8. 5	9. 24	153	68	16. 7	493	522	547	547	23. 6	80. 8	1974～ 1976

が容易なため安定して高い。多肥または密植栽培で増収するが、耐肥性は「イシカリ」よりやや低い。

栽培適地と奨励態度 空知、石狩、後志、胆振、日高、桧山北部、渡島北部、上川中南部、留萌中南部の平地地に適し、これ等地帯の「ゆうなみ」に置き換える。「ゆうなみ」と同程度の施肥量で以上の収量が期待出来るので多肥栽培はさけること、割刈が多いので適収獲を励行し米質の悪化を防止する事が必要である。

〈糯 種〉

(29) はやもち (北育26号)

来歴「はやもち」は、北海道立農業試験場北見支場において、1952年(昭27)に「ユキモチ」を母とし「水稻農林20号」を父として人工交配を行い、以来選抜固定をはかってきたものである。1959年(昭34)に「北系3406」の系統番号をつけて、生産力検定予備試験を実施、1961年(昭36)に「北育26号」の系統名をつけ、道内の関係試験機関において、生産力検定並びに特性検定試験を行って適応性を検討し、翌年より奨励品種決定調査および現地調査を行い、地方適否を確かめた。1965年(昭40)優良品種に決定し、「はやもち」と命名された。

特性概要 1. 稈長は、「双豊糯」程度で中程。穂数は、「双豊糯」よりもやや少ないが、草型は偏穂数型。穂は「双豊糯」より短く、中程度、粒着はやや密である。芒性は無芒で、稃先色は「農林20号」よりもやや薄い暗褐色。初期生育は旺盛。

2. 玄米の性状については、糯種で形状は「双豊糯」よりも円く、やや円に属し、粒大は「双豊糯」より豊満でやや大きく、中に属する。色沢は「双豊糯」よりやや劣るが白で、品質は中の上。

3. 出穂期は、「双豊糯」より2～4日、登熟がよいので成熟期は5～7日程度早く、早生の早に属する(「農林20号」が早生の中)。

4. 耐冷性は、障害型に対しては「双豊糯」程度かやや強く、ないしやや弱に属する。

5. いもち病抵抗性は、「双豊糯」程度で中ないしやや弱に属する。

6. 倒伏に対しては、「双豊糯」と同程度で、中ないしやや強。

7. 収量性については、良年および良環境地帯では「双豊糯」と同程度かやや劣るが、不良年および不良環境地帯では「双豊糯」より多収で、登熟が良いので、青米や層米の発生が少なく、年次間の収量変動が小さい。

栽培適地と奨励態度 網走支庁管内および上川支庁北部、十勝支庁管内の「双豊糯」を栽培している地帯に適する。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1穂 穂数	玄米重	稈重	1穂重	1,000 粒重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
北見農試	冷床	8. 4	(9.19)	(148)	69	15.2	17.0	347	703	816	18.6	79.9	1961～ 1964
十勝農試	冷床	8. 1	9.21	150	61	15.0	19.6	322	452	824	19.5	82.1	1961～ 1963
北海道農試	冷床	7.29	9.14	—	—	—	—	394	—	833	20.3	82.7	1961～ 1962

() は1964年を除く。

栽培上の注意としては、いもち病抵抗性は「双豊糯」程度なので、防除は「双豊糯」に準じて行い、障害型耐冷性では「双豊糯」よりもいくらかは強いが、中ないしやや弱なので、多肥栽培および極端な冷水田での栽培はさけること。〔1971年（昭46）廃止〕

(30) かむいもち（上育266号）

来歴 「かむいもち」は、1953年（昭28）北海道立農業試験場上川支場で「新栄」を母とし「上育161号」（「大国早生」×「福糯」）を父として人工交配を行い、その後交配種子を2年間貯蔵し、1956年（昭31）にF₁を養成し、それ以来選抜固定をつづけ育成したものである。1962年（昭37）に「上系1013」の系統番号をつけ、1963年（昭38）に「上育266号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめた。1965年（昭40）優良品種に決定し、「かむいもち」と命名された。

特性概要 1. 出穂期は「双豊糯」より遅く「ユキモチ」よりは早く、中生の早である。しかし、登熟の早さは「双豊糯」より早いので、成熟期は「双豊糯」と大差なく早生種である。
2. 草型は偏穂数型で、稈長は「ユキモチ」よりは短くやや短程、穂長は「双豊糯」より短い。
3. 粒着は中で、芒性はやや少ない短芒があり、籾および籾先色は黄色である。
4. 苗の生育および初期分けつは中程度で「双豊糯」よりやや良い。葉の枯上りはやや多い。
5. いもち病耐病性は、葉いもちに対しては「双豊糯」よりやや弱く、穂頸いもちに対しては「双豊糯」程度ないしはやや強く「しおかり」程度の中である。
6. 稈は太く稈質は「双豊糯」程度で「ユキモチ」に優り、耐倒伏性は「双豊糯」程度ないしはやや優り、やや強である。
7. 耐冷性は、障害型に対しては「双豊糯」および「ユキモチ」より強く、やや強ないし強である。遅延型に対しては「双豊糯」程度ないしやや弱く「ユキモチ」よりやや強く、中程度である。
8. 収量は、普通年においては「双豊糯」および「ユキモチ」とほぼ同程度であるが、耐冷性、耐倒伏性などから、場所および年次間の安定性は比較的高い。
9. 玄米は、形状中で「双豊糯」よりやや円形である。大きさは「双豊糯」より僅かに大きく中、光沢および縦溝の深さは「ユキモチ」と大差ない。梗粒の混入は「双豊糯」および「ユキモチ」よりも少なく、極めて少ない。品質は「双豊糯」および「ユキモチ」と同程度ないしやや優る。食味は「双豊糯」より優り「ユキモチ」並みと思われる。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 入 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 ℓ 重	1,000 粒 重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
上川農試	直播	8. 10	9. 30	139	69	14.2	36.0	423	524	828	18.8	78.2	1964
	冷床	8. 2	9. 18	148	74	15.5	25.0	470	509	835	19.9	78.4	1963～ 1964
原原種農場	冷床	8. 7	9. 29	157	74	15.2	23.0	486	519	798	21.6	81.8	”
中央農試	冷床	8. 7	10. 2	167	64	15.7	21.2	450	—	807	21.0	82.2	”
北海道農試	冷床	8. 8	9. 26	156	72	13.6	17.5	420	571	—	19.4	81.6	”

北海道立農業試験場資料 第9号 訂正表

頁・行	誤	正	頁・行	誤	正
目次・菜豆(9)	(中育D-7号)	(十育D-7号)	140・上-3,7,8,9	ファイヤボール	ファイアボール
27・表下-1	成苗, 中苗	成苗(沖植土)	"・下-2,8	"	"
		中苗(沖植土)	141・上-1,4,5	"	"
29・上-22	ないしやや弱...	中ないしやや弱...	"・下表右-5	13,273	9,330
31・上-14	～の晩生～	～の晩～	142・上表右-5	11,874	10,860
33・表左-2	苗代様式・冷床	(トル)	下表右-4	457.7	4,577
"・下-1	人工支配	人工交配	" "	673.9	6,739
34・表左-2	空 欄	栽培法	144・下-21	品種属に～	品種群に～
"	"	標準播	151・上-10	～の(そぞ透ゆり)	～の(えぞ透ゆり)
"	"	標準播	158・上-16	道地・～	道央・～
35・上-3	穂密度は～	着粒密度は～	159・上-8	原名から「マンモス」と命名した。	(トル)
"・"-8	雲紋病	雲形病	"・表上-1	草丈伸長率	草丈伸長量
"・"-14	12kg前後	12kg/10a 前後	164・下-1	チモシー農林合	チモシー農林合
"・表左-2	空 欄	栽培法	172・表左-4	空 欄	1971 (1951)
37・上-16	やや大粒	大粒	173・表左-1	"	穂数型
38・上-24	(欠)(カチミノリ)	(1966年(昭41)廃止)	174・表左-2	北育103号	空育103号
39・表上-1	冬損歩合 100%	0%	"	空育64号	北育64号
41・表下-2	冬損歩合 91%	9%	177・表左-1	空 欄	直立
49・上3	(欠)(交8号)	(1979年(昭54)廃止)	"	"	直立
58・下-1	(欠)(ホワイトワキシー)	(1975年(昭50)廃止)	180・表右2	"	「十勝長葉」×「大谷地2号」
"・表右-2	g	kg	"	"	「十勝長葉」×「大谷地2号」
61・上-1	～優良品質に～	～優良品種に～	185・表左1	"	帯微紅の白
"・表下-2	127	131	左2	"	淡緑
64・表下-2	117	123	左3	"	淡黄白
73・下表下-6	本	節	左4	"	硬
76・上-11	「斑小粒系-1」	「斑小粒系-1」	左5	"	や長球形
77・表左-6	個	本	左6	"	大
81・上-4	～に患られない	～に患まらない	左7	"	白地に臍部の周り
"・下-14	子種の～	子実の～			淡肉色地に赤褐色
83・表右-5	個分	個			の斑紋
86・下-1	まん性	つる性	左8	"	胆振地方を中心とした道央部
97・下-11	偏球形とあり	偏球形であり			
113・下-9	施光度	旋光度	192・表左-2	りんご農林1号	東北7号
115・上-5	「あまなみ」	「あやなみ」	207・表左-2	その他	その他
117・下-6	「あかむらさき」	「おかむらさき」		北土道輪第5号	北海道輪第5号
133・下-20	1974年(昭49)	1975年(昭50)	208・表左-6	日高種牧	(トル)
136・上-6	ファイヤボール	ファイアボール	"・"	カハダ	カナダ
"・表左-2	(欠)	cm	"右-2	雲形病	雲形病
"左-3	(欠)	cm	"右-1	全送	全道
137・上表上-1	(10a当り)	(a当り)	"右-1	オーチャードグラ	道東地域
"・下表上-1	(10a当り)	(a当り)	下-5	ス安定地帯	
138・上表上-1	(10a当り)	(a当り)	209・表右-3	合成品種法	合成品種法
"・"	腐敗果率	空洞果率	211・"左-2	空 欄	Milka Pajberg
"・下表上-1	(10a当り)	(a当り)	212・"右-3	"	デンマーク
139・上表上-1	(10a当り)	(a当り)	"右-2	"	デンマークから
"	腐敗果率	空洞果率			導入

栽培適地と奨励態度 「双豊糯」を栽培している地帯のうち、上川支庁管内の中北部、留萌支庁管内および空知支庁管内の北部に適している。なお、諸特性からみて「かむいもち」は普通肥栽培に適している。

(31) 工藤糯

来歴 「工藤糯」は、亀田郡大野町在住の工藤慶作氏が1954年（昭29）に「南糯」を母とし「多福糯」（府県産品種）を父として交配選抜を続けて、「工藤糯」という品種名のもとに附近農家に作付けされていたものである。1963年（昭38）から北海道立農業試験場渡島支場で原種を譲りうけ、系統育成と同時に生産力検定試験ならびに特性検定試験をおこなうとともに地方適否を知るため現地試験をおこない、1965年（昭40）優良品種に決定した。

特性概要 1. 稈長は中位で剛く、茎数は少く穂重型に属する。穂長は「南糯」よりやや短いが長の部に属し、粒着はやや密、無芒で稈ならびに稈先色は黄白である。

2. 玄米の性状 形状は中位で、粒大はやや小粒、色沢は良好である。

3. 熟期 出穂は「南糯」よりやや遅いが登熟日数が短いので成熟期はほとんど変わらず、中生の晩生である。

4. 障害抵抗性 いもち病には罹病するが「南糯」に比較すると断然強くやや強に属する。

耐病性は障害、遅延型ともにやや弱、耐倒伏性は普通肥栽培では「南糯」より断然強いが、多肥栽培では倒伏するためやや弱と判定される。

5. 収量性 極多収性で梗の「新栄」なみの収量を示す。

栽培適地と奨励態度 「南糯」の栽培可能な、渡島、松山南部、胆振沿岸地帯に限る。

殆んどの特性が「南糯」と同程度かそれ以上なのでこれにおきかえ栽培するが倒伏抵抗性が特に強くはないので多肥栽培はさけるべきである。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合 %	試 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 株 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 0 重 g	1,000 粒 重 g		
道南農試	冷床	8. 10	9. 28	159	79	17. 8	15. 1	447	502	818	20. 5	78. 7	1963～ 1964

(32) おんねもち（北育糯47号）

来歴 「おんねもち」は、北海道立農業試験場上川支場において、1961年（昭36）「北海182号」を母とし糯系統「上育230号」を父として人工交配を行い、翌年の冬期、温室にてF₂を養成、1963年（昭38）には冷水田で集団選抜を行い、翌年、北海道立北見農業試験場でF₄集団の一部を譲りうけ、糯、良質、耐冷を目標に個体選抜を行い、以来選抜固定をはかって来たものである。1966年（昭41）に「北系4129」の系統番号をつけ、生産力検定、特性検定試験に供試した。1967年（昭42）「北育糯47号」の系統名をつけ道内関係機関に配布、翌年より関係現地試験にも供試して地方適否を検討し、1970年（昭45）優良品種に決定し、「おんねもち」と命名された。

特性概要 1. 稈長は、「はやもち」「双豊糯」より短かく短稈に属する。穂数は、「はやもち」よ

り多く「双豊稲」と同程度で穂数型に属す。穂は「はやもち」と同程度であるが「双豊稲」より短かく中穂、粒着は中位である。芒性は、やや少の短で、稃先色は黄白である。草姿は直立型で良好である。

2. 出穂期は、「はやもち」より1日遅く「双豊稲」と同程度で北見地方では、中生の晩。成熟期は、「はやもち」よりも2～3日遅いが「双豊稲」よりは3～5日程早く、登熟は比較的良い方で、熟期では、中生の中に属する。

3. 耐冷性は、障害型に対しては、両稲品種よりも強く「しおかり」程度のやや強である。

4. いもち病耐病性は、葉いもちに対しては「はやもち」と同程度のやや弱、穂いもちに対しては両稲品種に比べて弱く、弱である。

5. 耐倒伏性は、「しおかり」程度のやや強である。

6. 玄米性状については、形状は「はやもち」よりは長粒で「双豊稲」並の中。粒大は「双豊稲」程度の中。両稲品種に比べ白度は高く、糯としての品質（粘り、こしの強さ、光沢など）も良く、総合的にみて、品質は両稲品種よりも優れており、中上の上である。

7. 収量性については、障害型冷害年では「はやもち」より多収、遅延型冷害年には「はやもち」と同程度で「双豊稲」よりは優れている。良好年では、両稲品種と同程度かやや多収を示す。また「双豊稲」に比べて、地域的にも年次的にも変動が少なく安定している。

栽培適地と奨励態度 網走支庁、十勝支庁、上川支庁北部および留萌支庁北部の各管内で、「はやもち」「双豊稲」が作付けされている地帯に適応する。

栽培上の注意としては、いもち病に対する抵抗性が弱いので、各地帯の防除基準に基づき、完全防除が必要であり、多肥栽培はさけること。植え込みなどによって穂揃性が悪くなる傾向がみられるので、健苗育成により、また栽植株数および1株苗立数は、各地帯の基準を確保するなどして、この傾向を補う必要がある。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		穂揃 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1株 穂数	玄米重	稈重	1粒重	1,000粒 重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
北見農試	冷床	8. 3	(9.24)	(155)	62	15.6	23.3	503	—	827	19.4	78.7	1967～ 1969
十勝農試	冷床	8. 2	9.22	151	63	16.8	22.9	440	424	813	20.3	80.9	〃
上川農試	冷床	8. 1	9.18	150	67	16.2	23.3	524	474	800	19.6	79.8	〃
原原種農場	冷床	7.31	9.17	146	62	15.8	22.1	537	403	820	20.9	81.3	1968～ 1969

注) 北見の1969年は成熟期に達せず除く。

(注) 各品種の熟期は出穂期と成熟期について、育成場を中心としたその地方ごとに、対象品種と比較した早晩性が記載されているが、この差は栽培地域や環境条件によって多少の変動がつきまとうため、厳密には全道一本で表示するよりも正確である。一方全道的に全品種の早晩性を把握する必要もあるので、現在の奨励品種について出穂の早晩を示すとおおむね次のようである。

極早生 きよかぜ

早生の早 はやこがね

早生の晩 きたこがね、なるかぜ、かちほなみ、イシカリ*、おんねもち。

中生の早 しおかり*、うりゅう、ともゆたか、ゆうなみ、かむいもち。

中生の中 ほうりゅう、そらち、キタヒカリ。

中生の晩 さちほ

晩生の早 ユーカラ

晩生の中 マツマエ

晩生の晩 巴まさり

・は上川農試の分類によるが、中央農試ではともに中生の早に属す。いずれにせよ両品種の差は0～2日である。

2. 陸 稲

(1) 北海早生1号（北海早生純1号）

来歴 「北海早生1号」は、1953年（昭28）北海道立農業試験場十勝支場で在来の「北海早生」から個体選抜を行い、以後系統選抜を続け1956年（昭31）に「3105」の系統番号で生産力検定予備試験に供試し、1958年（昭33）に「北海早生純1号」の系統名をつけ生産力検定試験および特性検定試験に供試するとともに、十勝管内で現地委託試験にも供試して地方的適否を確かめ、1961年（昭36）に優良品種に決定し、「北海早生1号」と命名された。

特性概要 1. 出穂期、成熟期ともに「北海早生」より2～3日早い。

2. 草型は「北海早生」に類似するが、稈長および穂長は若干短い。

3. いもち病抵抗性は「北海早生」と同程度である。

4. 冷水抵抗性は遅延型、障害型ともに「北海早生」に比し強い。

5. 収量は平年においては「北海早生」にやや優る程度であるが、冷害年にはかなり優り確収性が高い。

6. 玄米の形状および品質は「北海早生」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 在来の「北海早生」に比し早熟で耐冷性が強い点以外は、とくに相違はないので、十勝、網走両支庁管内および本道中南部の各地で「北海早生」に換えて奨励する。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 穂 本 数	玄米重 kg	稈重 kg	1 穂 重 g	1,000 粒 重 g		
十勝支場	冷床	8. 15	9. 27	139	64	18. 2	389	181	248	802	20. 3	78. 5	1957～ 1960
上川支場	冷床	8. 3	9. 12	124	76	18. 6	390	221	256	823	19. 9	82. 6	1959～ 1960
北見支場	冷床	8. 23	9. 26	138	56	18. 2	324	113	200	776	20. 4	80. 7	1960

3. 大 麦

(1) ほしまさり（訓系16号）

来歴 「ほしまさり」は、1962年（昭37）北海道立農業試験場北見支場において「春星」を母とし、「女系8号」を父として人工支配を行い、F₁は温室で養成し、F₂までは集団養成、F₄で個